

新編輯呼びかけ版 『ドイツチエ・イデオロギー』

カール・マルクス&フリードリヒ・エンゲルス著

リヤザノフ編 三木清 訳

凡例（以下のような編輯をしました）が、廣松版を参考にしてのものでドイツ語を見ていないので厳密なものではありません。あくまで参考と言うことです。

本格的な編輯版は**小林昌人編岩波文庫版**を見てください。」

1. マルクスの文は、青色で表示し、エンゲルスの文は黒である。

2. 緑色の文、および緑の { }、◇、／**／で括られた文は、原稿に対する説明・作成者の新規挿入に当たる文である。底本に無い削除文を◇で挿入したが、廣松版からの無断借用である。

3. 緑字の中括弧〔〕は、原稿番号または脚注を示す。〔〕内の袋文字数字は原稿のボーゲン番号を、青色の数字は、マルクスの振ったページ番号である。

〔1〕とあるのは、その原稿の終りを示す。特に必要と判断したときのみ記す。

例1 {6a=8} 第6ボーゲンのa面で、マルクスの番号付では8ページ。

例2 {1?b} 番号は付けられていず、〔1〕の下書きと見られるページのb面。

例3 {8Rb} ボーゲン番号8で、右欄のb面。右面は追記用利用されているので、特に記載しないが、一部挿入箇所が指定されていない、メモ風記述などである時、使用する。こ

の場合は、追記用の字体は使わない。

④ 網点が入っている（*で括られた）文章は、原稿において縦線で消去されている文である。

⑤ 抹消線（^で括られた）は、原稿において横線で消去されている箇所である。

⑥ 底本の傍点はアンダーラインであるので左ラインにした。

⑦ エンゲルスによる追記は、**太ゴシック**にする。

⑧ **マルクス**による追記書き込みは、**青字のゴシック**にする。

原稿について

大きな東一七枚には、エンゲルスによる番号があり、六〇、二〇、二一、八四、九二の三ブロックに分かれる。小さい東七枚には、一、五の番号のあるものと番号の無い二枚がある。番号のない二枚を、**{11}**、**{22}**とする。

廣松渉の推定する最終構案は、次々頁に載録する。

本版はリヤザノフによる配列を変更していない。

三木清の訳は頁の区切りを考慮していないので、文の途中の

頁番号は正確ではないので注意をしてください。

原稿用紙			
表			
{1 a}	{1 Ra}	{1 c}	{1 Rc}
{1 b}	{1 Rb}	{1 d}	{1 Rd}
裏			

目次

原稿番号 (頁番号)	頁			
		{ 7a~d=12~15}	31 ~	{86a~d=48~51}
{序文}	5~	{ 8a~d=16~19}	36~	{87a~d=52~55}
{ 1a, b}	10~	{ 9a~d=20~23}	46~	{88a~d=56~59}
{ 1? b, c}	12	{10b~d=24~26}	52~	{89a~d=60~63}
{ 2a, b, c}	13~	{11a~b=27~28}	56~	{90a~d=64~67}
{ 1? c, d}	17~	{20b~d=30~32}	61 ~	{91a~d=68~71}
{ 2?}	19	{21a,b,d=33~35}	65~	{92a=72},{92b}
{ 5a~d}	20~	{84a~d=40~43}	69~	{ 3a~d}
{ 6a~d=8~11}	25~	{85a~d=44~47}	75~	{ 4a, b}
				125~

「フオイエルバッハ」篇 構成推定

序説 {1} ……………下書き {1?a}, {1?b}

A章 イデオロギー一般、特にドイツの

緒論 {2}, {6a} ~ {6c}

本文 {6d} ~ {8a} ……………異稿 {1?c}, {1?d}, {2?}, {5}

{8a} ~ {9d} ……………関連 {91a} ~ {92a}

{10b}, {10c}

結語 {10c} ~ {11c}

B章

緒論 {20b} ~ {21d}

本文 {3}, {4}, {84a} ~ {87a}

結語 {87a} ~ {91a}

マルクス草案

『ドイツチエ・イデオロギー』への序文

〔序文〕

人間は従来つねに、自分自身に関して、即ち、自分が何であるか若くは何であるべきかについて、間違つた観念を抱いて来た。神とか規範人とか等々についての彼等の観念に従つて、彼等は彼等の諸関係を律して来た。彼等の頭脳から生れ出たものは大きくなつて彼等の手に負えなくなつた。彼等の被造物の前に、創造者たる彼等は、身を屈して来た。我々は彼等を、彼等がその軛のもとで萎縮せるところの幻想、観念、独断、空想的迷妄から解放しよう。我々は思想のこのような支配に対して叛逆しよう。我々は彼等に、これらの空想をば人間の本質に相應せる思想と取り換えることを教えよう、とひとりの者は云い、それらの空想に対して批判的態度をとることを教えよう、と他の者は云い、それらの空想をば脳裡から追い払うことを教えよう、と第三の者は云う、そうすれば――現存する現実には崩解するであらう。

このような罪のない、子供らしい空想が最近の青年ヘーゲル派の哲学の核心をなしているのである。この哲学はドイツに於て、単に一般公衆から驚愕と畏敬の念をもつて迎えられるばかりでなく、また哲学的英雄たち自身によつて、世界を顛覆する危険性をもち犯罪的な無遠慮をおかすものだという仰山な意識をもつてふれ出されているので

ある。本出版物の第一巻の目的とするところは、自分を狼と見做しまたそのように見做されているこれらの羊どもの正体を暴露し、如何に彼等がドイツ市民たちの諸觀念に対してただ哲学的に吼えついているに過ぎないかということ、如何にこれらの哲学的解釈家たちの大言壮語がただ現実のドイツの諸状態の惨めさを反映しているに過ぎないかということを示すにある。それは、夢想的で愚鈍なドイツ民族の性に合っているところの現実の影を相手とする哲学的闘争の弱点を暴露し、その信用を奪い取るという目的をもっている。

昔或る感心な男が、人間が水に溺れるのは、ただ彼等が重力の思想に憑かれている故である、と想像した。もしも彼等にして、例えばこの重力の表象は迷信的な表象であるとか、宗教的な表象であるとかと宣言することによつて、そのものを脳裡から追い払つてしまふならば、彼等はあらゆる水の危険を超越しているであらう。一生涯彼は、その有害な結果についていずれの統計もが彼に新たな無数の証明を供したところのこの重力の幻想と闘争した。この感心な男というのが新しいドイツの革命的哲學者たちの典型であつた。

→ドイツの觀念論はひとつの特殊な差異によつてあらゆる他の民族のイデオロギイから區別される。後者もまた、世界を觀念によつて支配されるものとして、觀念及び概念

を规定的原理として、一定の思想を物質的世界の哲學者たちにとって近づき得る神秘として、考察している。*

―*ヘーゲルは実証的な觀念論を完成した。彼にとつては全物質的世界が一の思想世界に、そして全歴史が一の思想の歴史に転化したばかりではない。彼は思想的事物を登録することをもつて満足しない、彼はまたその生産活動をも叙述しようと努めた。*

―*ドイツの哲學的批判家たちは、共同の敵、即ちヘーゲルの体系をもっている。この体系こそ彼等がそれと闘争するところの世界である。彼等の理論的前提をなしていると同時に彼等がそれを絶滅しようと努めているところのヘーゲルの体系、一人残らず、觀念、表象、概念がこれまで現実の人間、世界を支配しまた規定して来たということを、現実の世界が觀念的世界の一の生産物であるということを、主張している。そのことはこの瞬間に至るまで行われている、しかしそのことはそうあつてはならない筈だ。彼等は、如何に彼等が、彼等の意見に従えば自分自身の自由な思想の權力のもとに呻吟しつつある人間世界を、救済しようとするかの仕方^に於て、互いに相違している。彼等は、何を彼等が自由な思想であるとして宣言するかという点に於て互いに相違している。彼等は、この思想の支配に対する信仰に於ては相一致している。彼等は、彼等が彼等の孤立せる思惟活動をもつて十分なもの^と見做しているにせよ、それとも一般的意識を獲得

しようと思つてゐるにせよ、とにかく彼等の批判的な思惟活動が現存するものの没落をもたらずに相違ないという信仰に於ては相一致してゐるのである。＊

「＊ドイツの哲學者たちは、彼等のヘーゲルの思想世界をどう考えていいかに迷うたはてに、彼等の見解によれば、即ち、ヘーゲルの幻想に従えば、従来、現実の世界を生産し、規定し、支配したところの思想、觀念、表象の支配に対して抗議する。彼等は抗議を申し立ててそしてくたばつてしまふ」〔……〕

「＊ヘーゲルの体系に従えば、觀念、思想、概念が人間の現実の生活を、彼等の物質的世界を、彼等の実存的な諸關係を生産し、規定し、支配した。彼の叛逆的な弟子たちはこの点を彼から受け取つてゐる」〔……〕

第一篇

フオイエルバッハ

唯物論的見方と觀念論的見方との対立

I フォイエルバッハ

ドイツのイデオログたちの告げるところによれば、ドイツは最近数年間に於て一の比類なき変革を経験した。シュトラウスに始つたヘーゲルの体系の分解過程は、あらゆる『過去の諸権力』がその渦中に引き込まれているところの一の世界的動乱にまで發展した。この一般的な渾沌のうちに、強大なる諸王国が形成されたかと思えば、忽ちにしてまた没落し、諸英雄が立所に現われ出たかと思えば、ヨリ大胆にしてヨリ強力な競争者たちによつて再び闇黒の中へ投げ返えされた。それは一の革命であつた、それに比してはフランス革命も兒戲に等しい、それは一の世界的闘争であつた、その前にはデイドコスたちの諸闘争も見窄らしく見える。前代未聞の目まぐるしさをもつて、諸原理が互いに推し除け合い、思想の英雄たちが互いにひしめき合つた。かくて一八四二年から一八四五年に至る僅かな歲月の間に、ドイツに於てはいつもなら三百年の間に於けるよりも一層多くのものが清算された。

凡てこれらのことは純粹思想の中で起つた筈のものとされている。

げにも事は一の興味ある出来事、即ち絶対精神の腐敗過程ということにかかわつていのである。この偉大なる解放戦争の残滓として結婚式招待通知人や葬儀通知配達人の缺けている理由はなかつた。この髑髏の種々なる構成要素は最後の生命の火花の消滅の

後に解体して、新しい結合を結び、新しい実体を形成した。従来絶対精神の搾取によって生活して来た種々なる哲学的産業家たちは、今やこれらの新しい結合に没頭した。**〔二五〕**いずれの者も彼のものに帰した部分の売捌を出来るだけ大きな商売で経営した。これは競争なしにすむわけにゆかなかつた。競争は最初のうちはかなり市民的に且つ堅実に行われた、後に至つて、ドイツの市場が供給過剰になり、しかもあらゆる骨折にも拘らず世界市場に於てちつとも売行が良くないとなるや、商売はいつものドイツ流儀に従つて、工場式生産及び仮装生産、品質の劣悪化、原料のごまかし、空取引、空手形使用、及びいつものドイツ流儀のあらゆる現実的基礎を缺ける信用制度によつて、不堅実にならしめられた。競争は今や我々に世界的な変動として、最も強大なる諸結果と諸成果との産出者として叙述され且つ構成されているところの一闘争となりはてた。

その唱道が尊敬すべきドイツ市民の胸のうちにさえ好意的な国民的感情を喚び起しているこれらの哲学上の大言壮語を、**青年ヘーゲル派のこの全運動**という至つて小さな現実の見窄らしさと地方的限局性を、直観的に認識するためには、それを一度ドイツの外部に横たわれるひとつの立場から眺めることが必要である。

[I?c] この原稿は、[II]の下書き稿と推定される。[I?ca]と[I?cb]は、大半が[II]の清書稿に採用された。三木版では訳出せず。残りの続き部分が、以下に訳出されている。}

[I?cb]

／＊それだから我々はここにこの運動の個々の代表者たちに対する特殊の批判に先立つてヘドイツの哲学及び全イデオロギートに関する、若干の一般的論述を行う。へまこれらの論述は続いてなされる個別的諸批判の理解のために且つその基礎付けのために必要な程度に於て我々の批判の立場を示すに十分であろう。我々はこれらの論述を[I?c]あたかもブホイエルバソハに向ける。蓋し彼は少くとも一の進歩をなした唯一の人であり且つその思想に我々が裏面目に立ち入り得る唯一の人であるからである。これらの論述は彼等の凡でに共通なイデオロギートの諸前提を詳細に闡明するであろう。＊／

{ここに訳出された部分は全文が同時に横線削除でもある。なお、へゝの削除線の入っている部分はエンゲルスによる削除の由。}

/[I?c] の続きは後頁に、p16。}

フオイエルバッハ

A イデオロギー一般、特にドイツ的イデオロギー

ドイツで行われているドイツ的批判は、その最近の努力に至るまで、哲学の地盤を離れ去らなかつた。自己の一般的・哲学的諸前提を吟味するへには及びも付かなかつたので、**どこか**、ドイツ的批判の**全体の問題**さえもが特定の哲学的体系、即ちヘーゲルの体系の地盤の上に生じたものである。単にその解答のうちにはかりでなく、既に問題そのもののうちに一の神秘化が存した。ヘーゲルへのこのような依属こそ、何故に、これらの最近の批判家たちのいずれもが、ヘーゲルを超越している、とどんなに主張していても、彼等の誰もがヘーゲルの体系の一の包括的な批判は単にこれをへるまで試みていない**試みる**ことさえもしなかつたか、ということの理由である。ヘーゲルに対する、また彼等相互に対する彼等の論争なるものは、彼等の各々の者がヘーゲルの体系のひとつの方面を取り出して、これを全体の体系に対して、並びに他の人たちによつて取り出された別な諸々の方面に対して、対立させるということに局限されている。最初のうちひとは実体や自己意識の如き、純粹な、本物のヘーゲルの諸範疇を取り出した、後になってひとはこれらの諸範疇を、種族、唯一者、人間、等々の如き、ヨリ現世的な名稱によつて俗化した。

シュトラウスからスチルナーに至るドイツの全哲学的批判は、宗教的諸表象の批判に

局限されている。△上の批判たるや、一切の禍から世界を救う絶対的な救世主であるとする要求をもつて現われた。宗教は絶えずこれらの凡ての哲学者たちの氣に召さぬ諸關係の究極的な原因として、△敵の首魁として用され且つ取扱われた。▽ひとは現實の宗教及び本来の神学から出發した。宗教的意識とは何か、宗教的表象とは何か、はその後の経過に於て色々に規定された。進歩の存した点といえ、見たところ支配的な形而上学的、政治的、法律的、道德的及びその他の諸表象をもまた宗教的若くは神学的諸表象の範圍のもとに包摂し、同様に政治的、法律的、道德的意識をば宗教的若くは神学的意識であるとなし、且つ政治的、法律的、道德的人間を、究極に於ては『人間なるもの』をば宗教的であるとなしたことであつた。宗教の支配ということとは前提されていたのである。支配的な關係はいずれも次第に宗教の一關係であるとされ、そして礼拝に、法律礼拝に、国家礼拝に転化された。到る處ただ教儀が、そして教儀に対する信仰が問題であつた。世界は絶えず広まりゆく範圍に於て聖列に加えられ、遂に尊敬すべき聖マックスに至つて世界をひとくるめに神聖であると宣し、かくて永久に結末をつけることが出来た。

旧ヘーゲル派の人々は凡てのものを、それがヘーゲルの或るひとつの論理的範疇に還元されるや否や、理解した。青年ヘーゲル派の人々は凡てのものを、それを宗教的諸表象とすりかえるか若くはそれを神学的であると宣言することによつて、批判した。青年

ヘーゲル派の人々も、現存する世界に於ける宗教の、概念の、普遍的なものの支配に対する信仰に於ては、旧ヘーゲル派の人々と意見を同じくしている。ただ前者は、後者が正統であるとして祝するところのこの支配を篡奪であるとし攻撃するというだけの相違である。

② これらの青年ヘーゲル派の人々にあつて表象、思想、概念、一般に彼等によつて独立のものにされた意識の諸生産物が人間の本来の桎梏であると見られること、あたかも旧ヘーゲル派の人々にあつてそれらのものが人間社会の真の紐帯であるとされるのと軌を一にしているからして、論ずるまでもなく、青年ヘーゲル派の人々はまた単に意識のこれらの諸幻想に対して闘争することだけが必要なのである。彼等の想像に従えば、人間の諸関係、その全体の行動営為、その桎梏と制限は、人間の意識の生産物であるからして、青年ヘーゲル派の人々は、首尾一貫した仕方、人間の現在の意識を人間的な批判的な或いは利己的な意識と取り替え、それによつて人間の制限を排除すべきである、という道徳的要請を人間に課しているのである。意識を変化せよ、というこの要求は、畢竟、現存するものを違つて解釈せよという、換言すれば、それを或る違つた解釈によつて承認せよ、という要求になる。青年ヘーゲル派のイデオログたちは、彼等のいわゆる『世界を震動せしめる』**思想****言辭**にも拘らず、最大の保守主義者である。彼等のうち最も新進の人々が、彼等はただ『言辭』に対してのみ闘争する、ということを主張し

ているのは、彼等の活動にとつて正しい表現を見出したものというべきである。ただ彼等は、彼等がこれらの空語そのものに空語以外の何物をも対立せしめているのではないということ、また彼等にして単にこの世界の空語に対して闘争するのみであるときには、彼等は現実に存立するところの世界に対して決して闘争してゐるのではないということ、を忘れてゐるのである。このような哲学的批判の達成し得た唯一の結果は、**[2d]**キリスト教についての二三の、しかもその上に一面的な、**宗教史的な**解明であつた、それのこれ以外の全主張は、このような取るに足らぬ解明をもつて世界史的な発見を提供したものであるとする、その要求に附け加えられた装飾物であるに過ぎない。

これらの哲学者の誰も、ドイツの哲学とドイツの現実との聯関について、彼等の批判と彼等自身の物質的環境との聯関について問うということに想到してゐないのである。

[2]

一、イデオロギー一般、特にドイツ哲学

A

「我々は唯一つの科学、即ち歴史の科学を知るのみである。歴史は二つの方面から見られて自然の歴史と人間の歴史とに区分されることが出来る。けれどこの二つの方面は分離すべきでない、人間が生存する限り、自然の歴史と人間の歴史とは相互に制約し合う。自然の歴史、いわゆる自然科学は、ここでは我々の問題とはならない、けれども人間の歴史には我々は立入らねばならぬであろう、なぜなら殆ど凡てのイデオロギーは歸するところ、この歴史のゆがめられた解釈であるか、或いはこの歴史からの全然の抽象であるか、であるからである。イデオロギーそのものは単にこの歴史の諸側面の一つに過ぎない。」*

我々の出発点たる諸前提は、なんら恣意的なものでなく、なんらドグマではない、それは現実的な諸前提であつて、このものからはひとはただ想像の上で抽象し得るばかりである。それは、現実的な個人、彼等の行動、及び所与のものとして見出されたる並びに彼等自身の行動によって作り出されたる彼等の**物質的な**生活諸条件である。それ故に、これらの諸前提は【122】純粹に經驗的な仕方で確かめ得るものである。

一切の人間歴史の最初の前提は、言うまでもなく、生きた人間的個人の生存である。

へこれらの個人の、よつてもつて動物から區別される所以の最初の歴史的行動は、彼等が思惟するといふことではなく、却つて彼等が彼等の生活資料を生産し始めるといふことである。↓ それ故に確かめらるべき最初の事態は、これらの個人の肉体的組織と、それによつて与えられたところの彼等以外の自然に対する彼等の關係である。我々はここでもちろん、**人間自身の物理的性状にも**、また地質学的、風土学的、氣候的及びその他の諸關係の如き、人間によつて所与のものとして見出されたる自然的諸条件にも、立入ることが出来ない。へけれどもこれらの諸關係は、單に人間の根源的な、自然的な組織を、殊に人種の差別を制約するのみでなく、また彼等のその後今日に至るまでの全体の發展乃至無發展をも制約する。↓ 一切の歴史叙述はこれらの自然的諸基礎及び歴史の過程に於ける人間の行動によるそれらの諸基礎の變化から出發せねはならぬ。

ひとは人間を意識によつて、宗教によつて、その他思ひの儘のものによつて、動物から區別することが出来る。人間自身は、彼等が彼等の生活資料を生産し始めるや否や、自己を動物から區別し始めるのである、この行動たるや、彼等の肉体的組織によつて制約されている。人間は彼等の生活資料を生産することによつて、間接に彼等の物質的生活そのものを生産する。

人間が彼等の生活資料を生産する仕方は、先ず第一に、**所与のそして再生産さるべき**生活資料そのものの性質に依存している。

生産のこの仕方は、単に、それが個人の物理的存在の再生産であるという方面に向つてのみ考察さるべきでない。それは、むしろ既に、これらの個人の活動の一定の仕方であり、彼等の生活を表現する一定の仕方であり、彼等の一定の生活の仕方なのである。

個人が彼等の生活を表現する仕方はすなはち彼等の存在する仕方である。それ故に、彼等が何であるかは、**彼等の生産と、詳しく言えば、彼等が何を生産するか、並びにまた彼等が如何に生産するか**ということと、**合致する**。それ故に個人が何であるかは、彼等の生産の物質的諸条件に依存している。

この生産は人口の増加とともに初めて現われる。人口の増加はそれ自身また個人相互の間に於ける交通を前提している。この交通の形態はまた生産によつて制約されているのである。

122 この原稿は、残りは白紙であるとのこと

そこで事實はこうである、即ち、一定の仕方では生産的に活動している一定の個人は、これらの一定の社会的及び政治的諸關係を取り結ぶ。經驗的觀察は、各々の個々の場合に於て、社会的及び政治的組織と生産との聯繫を、經驗的にそして一切の神秘化と思辨とをまじえることなしに、示さねばならない(*)。社会的組織及び国家はつねに一定の個人の生活過程から生れる、けれどもここに謂う個人は、彼等自身の若くは他人の表象に現われるような個人でなく、現実にあるがままの個人、換言すれば、行動し、物質的に生産しているところの、従つて一定の物質的な且つ彼等の恣意から独立な諸制限、諸前提及び諸条件のもとで活動しているところの個人である。

[*この箇所は廣松版によれば、「思弁を抜きに、立証する提示する^{△であらう}答である」]

△これらの個人が作るところの表象は、自然に對する彼等の關係についての表象が、或いは彼等相互の關係についての表象が、それとも彼等自身の性質についての表象である。これらの凡ての場合にこれらの表象が、彼等の現実的な諸關係及び活動の、彼等の生産の、彼等の交通の、彼等の社会的及び政治的組織[△]、行動の[△]、現実的なまたは幻想的な意識的な表現である、ということとは明白である。これと反對の見方は、現実的な、物質的に制約された個人の精神のほかになお一の別個独立な精神が前提されるときにのみ可能である。[56]これらの個人の現実的な諸關係の意識的な表現が幻想的であ

ゑとして、即ち、彼等が彼等の表象の中で彼等の現実を逆立ちせしめてゐるにしても、それはまた、彼等の局限された物質的な活動の仕方並びにそれから生ずるところの彼等の局限された社会的諸關係の結果なのである。↓

觀念、表象、意識の生産は、先ず第一に、人間の物質的活動及び物質的交通のうちに、現実的生活の言葉のうちに直接に織り込まれている。人間の表象作用、思惟作用、精神的交通は、ここではなお、彼等の物質的行動の直接な流出として現われる。ひとつの民族の政治、**法律**、道德、宗教、形而上学、等々の言葉のうちに見られるところの精神的生産についても、同一のことが云われ得る。人間は彼等の表象、觀念、等々の生産者である、しかしここにいう人間は、彼等の生産力の一定の發展によつて、且つその最高の形態に至るまでこの生産力に相應する交通の一定の發展によつて、制約されてゐるところの、現実的な、行動しつつある人間なのである。意識とは意識のある存在以外の何物でも断じてあり得ない、そして人間の存在とは彼等の現実的な生活過程である。全体のイデオロギーのうちに於て、人間及び彼等の諸關係が、丁度カメラの暗箱の中に於てのように、逆立ちして現われることがあるにしても、この現象は、網膜の上に於ける事物の倒立が人間の直接に物理的な生活過程から生ずるのと丁度同じように、人間の歴史的な生活過程から生ずるのである。



天上から地上へ降りて来るドイツ哲学とは全然反対に、ここでは地上から天上へ

昇られる。換言すれば、人間が語り、想像し、表象するところのものから出發されて、或いはまた語られたる、思惟されたる、想像されたる、表象されたる人間から出發されて、それから肉体をもつた人間に到達するのでなく、**現實に活動している人間**から出發されて、彼等の現實的な生活過程からして、この生活過程のイデオロギー的反射と反響の發展もまた叙述されるのである。人間の頭腦に於ける仮幻的構成物もまた、彼等の物質的な、經驗的に確かめ得る、そして物質的諸前提に結びつけられている生活過程の必然的な補足物である。このようにして、道德、宗教、形而上学及びその他のイデオロギー、**並びにそれらに相應する諸々の意識形態は**、もはや独立性の外觀を保持しない。それらのものはなんら歴史をもたない、それらのものはなんら發展をもたない、却つて、彼等の物質的生産と彼等の物質的交通とを發展せしめつつある人間が、このような彼等の現實とともにまた彼等の思惟と彼等の思惟の生産物とと一緒に變化するのである。意識が生活を規定するのでなく、却つて生活が意識を規定する。第一の見方に於ては、**ひとは生ける個人と見られた意識から出發する**、第二の、現實の生活に適應せる見方に於ては、**ひとは現實的な生ける個人そのものから出發し**、そして意識を單に彼等の意識として見るのである。

この見方は無前提ではない。それは現實的な前提から出發する、それはこのものから如何なる瞬間と雖も離れ去らない。この見方の前提は、なんらか空想的に孤立せしめら

れ固定せしめられた人間ではなく、却つて一定の条件のもとに行われる、彼等の現実的な、**⑤②**經驗的に直觀され得るところの發展過程のうちに於ける人間である。この活動的な生活過程にして叙述されるや否や、**△狹隘な△歴史は、彼等自身なお抽象的な經驗主義者たちに於けるように、死んだ諸事實の蒐集であることをやめ、或いはまた、觀念論者たちに於けるように、空想的な主体の空想的な行動であることをやめる。**

かくて、思辨のやむところ、現実の生活にあつて、**△現実的で、積極的な學問が開始される△**そこに**现实的な、実証的な科学、即ち、人間の実践的な活動の、実践的な發展過程の叙述が始まる。**意識についての空語はやみ、現実的な知識がこれに代らねばならぬ。独立なものとしての哲学は、現実の叙述がなされるとともに、その存在の媒質を失う。それに代つて現われ得るのは、たかだか、人間の歴史的發展の觀察から抽象して得られるところの最も一般的な諸結論の総括ぐらいなものである。これらの抽象は、それだけとしては、現実の歴史から切り離されては、全然なんらの価値ももたない。それらのものはただ、歴史的資料の整理を容易にし、その個々の層の序列を暗示することに役立つことが出来る。併しながらそれらのものは決して、哲学のように、歴史の諸時代がそれに従つて切り盛りされ得るような処方箋若くは図式を与えるものではないのである。困難は、反対に、ひとが資料——それが或る過去の時代のものであるにせよ若くは現代のものであるにせよ——の觀察と整理に、現実的な叙述に従事するとき、そこに初めて起つて来る。

これらの困難の除去は、ここに決して挙げられ得ないところの、却って各々の時代の個人の現実の生活過程及び行動の研究の結果を俟って初めて判明するところの諸前提によって制約されているのである。ここでは我々は、我々がかのイデオロギーに対抗して用いるこれらの抽象のうちの二三を取り出し、そしてそれを歴史上の諸事例について解明してみよう。

〔5〕

現実^⑧に於て、且つ実践的唯物論者即ち共產主義者にとつて問題なのは、現存の世界を革命することであり、既成の事物に実践的にはたらしかけそしてそれを變化することである。フオイエルバッハにあつて時としてこの種の見解が見出されるにしても、それは決して個々別々の思付以上に出でず、且つ彼の一般的な見方に対してあまりにも僅かしか影響をもつていない、従つてそれはここでは發展力を含んだ萌芽としてのほかなら問題になり得ないであらう。感性的世界についてのフオイエルバッハの見解は、一方ではその単なる直観に局限され、他方では単なる感覚に局限されて、『現実的な、歴史的な人間』の代りに『人間なるもの』を立てている。『人間なるもの』は現実に於ては『ドイツ人』である。第一の場合、即ち^⑨自然^⑩感性的世界の直観に於ては、彼は退引ならず、彼の意識や彼の感情に矛盾する事物に、彼によつて前提されているところの、感性的世界のあらゆる部分の、特に人間と自然との、調和を妨げる事物に、突き当るのである。

⑨Ra) (注意。、フオイエルバッハが明白卑近なるもの、感性的仮象を、感性的事実のヨリ精密な研究によつて確かめられたところの感性的現実に從属させているのが誤謬であるのでなく、誤謬はむしろ、彼が究極に於て、いわゆる『眼』をもつて、即ち、哲学者の『眼鏡』を通してそれを見ることなしには、感性というものを始末することが出来な

い点にある。) (G Ra)

そこで彼は、このような矛盾する事物を除くために、二重の直観に、単に『明白卑近なるもの』を直観するひとつの世俗的な直観と事物の『真の本質』を直観するひとつのヨリ高い哲学的な直観との間に、避難せざるを得ない。彼は、彼を取り巻く感性的世界が直接に永遠の昔から与えられた、つねに自己同一な事物でなく、却って産業と社会状態との生産物であるということを理解しない、というのは、彼は、感性的世界がへいずれの歴史的時代へに於ても、ひきつづく全世代の活動の結果であり、生産物であって、そしてその諸世代のいずれもがそれに先行する世代を土台にしており、その産業とそれの交通とを更に発達させ、その社会的秩序を変化せられた諸欲望に応じて変更したのである、ということを理解しないのである。最も単純な『感性的確知』の対象でさえ、ただ社会的発展、産業と商業的交通によつてのみ、彼に与えられているのである。桜樹は、殆ど凡ての果樹がそうであるように、周知の通りようよう数世紀前に、商業によつて我々の地帯に移植されたのであり、従つてそれは (G b = 9) 一定の時代に於ける一定の社会のこのような行動によつて初めてフオイエルバッハの『感性的確知』に与えられたのである。とにかく――後段に至つてなお一層はつきりと示されるように――現実在るがままの且つ生起しているがままの事物についてのこのような見方に於ては、如何なる深遠な哲学的問題も、全く簡単に、或るひとつの経験的事実に解消される。例えば、

自然に対する人間の關係に關する重要な問題、（但しは、ブルーノの言う如くば（一〇頁）（『自然と歴史とに於ける対立』）、両者が二つの互いに分離された『事物』であるかの如き、人間がつねに歴史的自然と自然的歴史とを面前に控えておらぬかの如き口吻のこの対立）に關する問題は、それから『実体』や『世界意識』についての一切の『測り難く高遠な著作』が生れてゐるほどのものであるが、この問題は、次のことを、即ち、大評判の『人間と自然との統一』なるものは産業に於て既に以前から成立しており、しかも各々の時代に於て産業の發達の大小に応じて異つた程度で成立してゐたということ、同じように、人間の生産力がそれに適應せる基礎の上に發達するに至るまでは、人間と自然との『鬭争』もまたそのようであつたということ、を洞察するときには、おのづから消滅する。産業と商業、即ち生活必需品の生産と交換は、一方、分配や種々なる社会階級の構成を制約すると共に、他方、その経営の仕方に於ては逆に後のものによつて制約される、——そこで、フォイエルバッハが、例えば、百年前には紡車と手織機しか見られなかつたマンチェスターに於て現在ではただ工場と機械だけを見、或いは、アウグストウスの時代であればローマの資本家たちの葡萄園と別荘以外の何物も見出せなかつたローマの平原に於てただ牧場と沼地だけを發見するということがそもそも生ずるのである。フォイエルバッハは特に自然科学の直観について語る、彼は物理学者や化学者の眼にのみ顯わになる秘密について述べてゐる。併しながら産業と商業なくして何

処に自然科学があるであろうか。この『純粋な』自然科学でさえ、実に、その目的並びにその材料を商業と産業によって、即ち人間の感性的な活動によって初めて得るのである。

[[Rb]] この活動、この絶えざる感性的な労働と創造、この生産こそ、実に、今存在する如き全感性的世界の基礎であつて、若し仮りにそれがただ一年間たりとも中絶されたとするならば、フォイエルバッハは、自然界のうちに驚くべく大きな変化を見出すばかりでなく、また全人間世界、彼自身の直観能力、否、彼自身の存在をさえ、忽ちのうちに失うであろう。尤もこの場合外的自然の優越性は依然として存在し、且つまたもとより、^{△この区別はなんち}このことは凡て、[[Rc]] 原生的な、種子なしの生殖によつて作られた人間にはなんら適用されない、けれどもこのような区別は、人間を自然から区別されたものとして見る限りに於てのみ意味をもっているに過ぎぬ。なおまた、フォイエルバッハがその中に生きているところの、人間の歴史に先行するこの自然は、今日では、^{△エュー}カアンドランドの奥地[△]新たに生成したオーストラリアの個々の珊瑚島に於てでもなければ、もはや何処にも存在せず、従つてまたフォイエルバッハにとつても存在しないような自然のことではないのである。[[Rr]]

尤もフォイエルバッハは、[[Cc=10]] 如何にして人間もまた『感性的対象』であるか、を洞察している点に於て、『純粋な唯物論者たち』に比して遙かにまさっている。けれ

ど彼が人間を単に『感性的対象』として捉え、『感性的活動』として捉えていないという点は別にしても、彼はこの場合にも自己を理論の簡圈内にとどめ、ために人間を、彼等の与えられた社会的聯関に於て、彼等が現に在るところのものに彼等をなしたところの彼等の現在の生活諸条件のもとに於て、把握していないが故に、彼は現實に存在し活動しつつある人間に決して到達することなく、却つてどこまでも『人間なるもの』という抽象体の所に立ちとどまり、わずかに『現実的な、個人的な、肉体をもつた人間』を感情に於て認めるところまでしか行つていない。即ち、彼の知れる『人間の人間に對する』『人間的關係』は、性愛と友情のみにとどまり、しかも彼はそれを觀念化して見ている。彼は現在の生活諸關係に對してなんらの批判も加えていない。それ故に彼は決して、感性的世界を、それを構成せる個人の總體的な、生ける、感性的な活動として把握するに到らない、そしてそれだから、例えば、健康な人間の代々に腺病の、過勞せる、肺癆になつた、飢餓に瀕せる無數の人々を見ると、彼は『ヨリ高い直觀』や『種に於ける觀念的平等』に逃避せざるを得ない、従つて彼は、共產主義的唯物論者が産業並びに社会組織の變革の必然性と同時にその条件を見るとところに於てまさに觀念論に逆轉せざるを得ないのである。

フオイエルバッハが唯物論者である限りのところでは、歴史は彼にあつて存在しない、そして彼が歴史を顧慮している限りのところでは、彼はなんら唯物論者でない。彼にあつ

ては唯物論と歴史とが互いに全く分離している、これは、尤も上に述べたことから既に明かである。

「さてそれにも拘らず我々が歴史についてここで立入つて論ずる所以のものは、ドイツ人は『ローマ』歴史及び歴史的という言葉に於て、あらゆる可能なものを表象して、ただ現実的なものだけは表象しない習いであるが故である、それについてはとりわけ『説教張りの雄辯家の』聖ブルトノーが立派な手本を示している。＊」

我々は、無前提的であるドイツ人の間にあつて、一切の人間的存在の、それ故にまた一切の歴史の第一の前提を、即ち、『歴史を作り』得るためには人間は生きてゆくことが出来ねばならぬという前提を、確認することをもつて始めなければならぬ。しかるに生きてゆくには何はさておき、食うことと飲むこと、住うこと、着ること、その他なお若干のものが必要である。従つて最初の歴史的行為は、これらの欲望を満足するため手段の生産、即ち物質的生活そのものの生産である、しかもこれは人間の命だけをたなぐために、今日もなお、数千年前と同様に、日々刻々遂行されねばならぬひとつの歴史的行為であり、日々刻々充足されねばならぬ一切の歴史のひとつの根本条件である。感性が、聖ブルーノーにあつてのように、一本の杖に、即ち最小限のものに、縮小されているときでさえ、それはなおこの杖の生産の活動を前提する。かくてあらゆる歴史の理解にあつて第一のものは、この根本事実を、その全き意味に於て且つその全き拡

がりに於て觀察し、そしてそれを正当に評価承認することである。このことをばドイツ人は、周知の如く、決してなさなかつた、それだから彼等は嘗て歴史にとつての地上的土台をもたず、そしてその結果嘗て歴史家というものをもたなかつた。フランス人及びイギリス人は、たとい彼等はこの事実といわゆる歴史との聯関を單に極めて一面的に把握したに過ぎなかつたにせよ——殊に彼等が政治的イデオロギーに囚われていた間はそうであつた——しかも彼等はともかくも、市民的社會の、商業及び産業の歴史を最初に書いたことによつて、歴史叙述にひとつの唯物論的土台を与える最初の試みをなしたのである。第二のものは、『 $\overline{v}a=12$ 』満足された最初の欲望——それ自体が、欲望満足の行動並びに既に獲得されたところの欲望満足のための道具が、新たな欲望に導くということである、——そして新たな欲望のこのような生産は、最初の歴史的行為である。かく見て來るとき、ここにドイツ人の偉大なる歴史的智慧なるものがどのような正体のものであるかが直ちに明かになる。彼等の偉大なる歴史的智慧は、彼等にとつて実証的な資料が欠けておりそして神学的なナンセンスも政治的な乃至文學的なナンセンスも並べ立てられないところでは、なんらの歴史も出来せしめないで、却つて『歴史以前の時代』なるものを出来せしめる、けれども如何にしてひとはこの『歴史以前』というナンセンスから本来の歴史に這入つて來るかの点については、我々に説明するところがないのである、——それにも拘らず他方では彼等の歴史的思辨は全く特別にこの『歴史以前』に

熱中している、というのは、彼等の歴史的思辨は、そこでは『生素な事実』によつてかきまわされる心配はないと信じているからであり、そして同時にそれは、ここではその思辨的衝動を全く恣にして仮説を千でも二千でも作つたり覆えたりすることが出来るからである。——ここにそもそもの初めから歴史的発展のうちに入り込んでいるところの第三の關係は、彼等自身の生活を日々新たに作る人間が、他の人間を作り始める即ち繁殖し始めるといふ關係である、——夫と妻、親と子の間の關係、即ち家族がそれである。この家族なるものは、当初は唯一の社会的關係であるが、後になつて、欲望の増加が新しい社会的諸關係を作り出しそして人口の増加が新しい欲望を生産するに至るや、一の從屬的な關係となり（ドイツに於ては例外である）、そしてそのときには、ドイツに於てなされるのをつねとするように、『家族の概念』に従つてではなく、存在する經驗的な所与事實に従つて、取扱われ、展開されねばならぬ。尤も社会的活動のこれら三つの方面は、三つの異なる段階として把握さるべきでなく、却つてまさにただ、歴史の端初以来且つ最初の間以來同時に存在し来りそして今日もなお歴史のうちに自己を主張しつゝあるところの三つの方面として、或いはドイツ人にわかるように書けば、三つの『契機』として、把握さるべきである。——ところで生の生産、労働に於ける自己自身の生の生産並びに生殖に於ける他の人間の生の生産は、既に直ちに二重の {7b=13} 關係として——一方では自然的な關係として、他方では社会的な關係として——現われる、

ここに社会的というのは、如何なる条件のもとに、如何なる仕方にて、そして如何なる目的のためにであるにせよ、多数の個人の協働が社会的として理解される場合の意味に於てである。ここからして、一定の生産の仕方若くは産業的段階はつねに一定の協働の仕方若くは一定の社会的段階に結びついており、**且つこの協働の仕方はそれ自身ひとつの『生産力』であるということ**、人間の支配し得る諸生産力の量は社会的状態を制約し、従つて『人類の歴史』はつねに**産業及び交換の歴史**との聯関に於て研究され、論述されねばならぬということ、が云われ得る。併しながらかような歴史を書くことがドイツに於ては如何に不可能であるかということもまた明瞭である、蓋しドイツ人にはそれに必要な理解力や資料が缺けているばかりでなく、また『感性的確知』が缺けており、且つひとはラインの彼岸では、そこではなんらの歴史もはや進行していないが故に、これらの事物についてなんらの経験もなし得ないからである。かようにして明かであるように、既にもともとから人間相互の間には、欲望と生産の仕方によつて制約され且つ人間そのものと起源の時を同じうする一の唯物論的聯関が存在している——この聯関たるや、人間をなおこの上に結合するところのなんらかの政治的若くは宗教的ナンセンスが存在することなくとも、つねに新しい諸形態を、従つて一の『歴史』を提供する。——上に既に根源的な、歴史的な諸關係の四つの契機、四つの方面を考察して來た後に、今や初めて、我々は人間がまた『意識』をもっているということを見出す。併しながら

またこれをもともと、『純粹な』意識としてではない。『精神』はもともと『**7c=14**』物質に『付かれ』ているという呪われたる運命をそれ自身にもっている、この場合物質は、運動する空気の層の、音の、簡単に言えば言語の形式に於て現われている。言語は意識とその起源の時を同じうする、——言語は実践的な、他の人間にとっても存在し、従つてまた私自身にとっても**〔はじめて〕**存在するところの現実的な意識である。そして言語は、意識と同じく、初め他の人間との交通の欲望とその必要から発生せるものである。

△私の環境に対する私の関係が私の意識である。↓一の関係の存在する場合、それは私にとって存在する、動物は何物に対しても関係せず、一般に関係しない。動物にとっては**その他のものに対する関係は関係として存在しない。**それ故に意識は、もともと既にひとつの社会的な生産物であり、そして一般に人間が存在する限りは、どこまでも社会的な生産物であるのである。意識は言うまでもなく最初には最も**手近かな**感性的な環境についての単に感性的な意識であり、意識的になりつつある個人の外にある他の人間及び事物との**局限された**聯関の意識である。それは同時に自然の意識であつて、自然は人間に対して初め一の全然外的な、全能な、侵し難き力として対立し、それに対して人間は純粹に動物的に関係し、それによつて彼等は恰も禽獣のように威圧される、かくしてそれは自然についての一の純粹に動物的な意識（自然宗教）である——**〔以下は挿入指定なくリヤザノフの判断〕**蓋しまさに、自然はなお殆ど歴史的に変化されていないからである、しかも

他方に於てそれは、周囲の個人と結合することの必然性の意識であり、彼がとにかくひとつの社会の中に生活しているのだということについての意識の端初である。この端初は、この段階の社会的な生活そのものと同様に、動物的である、それは単なる群居意識である、人間はこの場合、彼の意識が彼にとって本能に代っているという或いは彼の本能が意識的なものであるということによつてのみ、羊から区別されるに過ぎない。――

下は直前の書込の前にあり指定無し」ここに於て直ちにわかるように、この自然宗教或いは自然に

対するこの一定の關係は社会形態によつて制約されてると共にまた逆にこれを制約しているのである。ここでも、どこでもと同様に、自然と人間との同一性はなおはっきりと現われているのであつて、人間の自然に対する局限された關係が彼等相互の間の局限された關係を制約し、そして彼等相互の間の局限された關係が彼等の自然に対する局限された關係を制約している。この羊意識或いは種族意識は、その一層の發展と發達をば、生産性の増大、欲望の増加、及びこれら両者の根底に横たわるところの『 $d=15$ 』人口の増加によつて獲得する。それと共に分業が發展する、この分業なるものは、根源的には生殖行為に於ける分業以外の何物でもなく、次には自然的性能（例えば体力）、欲望、偶然、等々のためにおのずから即ち『自然生的に』形作られる分業であつた。意識は現実の歴史的發展の内部に於て分業を通じて發展する。↓分業は、物質的労働と精神的労働との分業が出現する瞬間からして初めて、現実的に分業となる。イデオログの最

初の形態僧侶が同時に生ずる。」この瞬間からして意識は、自己が現存する事物實踐の意識以外の何物かであるかの如く、何物か現実的なものを表象することなしに、現実的に何物かを表象しているかの如く、現実的に想像し得る——この瞬間からして意識は、自己を世界から解放し、そして『純粹な理論』、神学、哲学、道德学等々の構成へと移り行くことが可能となる。併しながらこのような理論、神学、哲学、道德学等々が現存する諸関係と矛盾に陥る場合にあってさえ、このことはただ、現存する社会的諸関係が現存する生産力と矛盾に陥っているということによつてのみ、起り得るのである、——尤もこのことはまた、或る特定の国民的範圍の諸関係の中に於ては、そのような矛盾がこの国民の範圍の中に生ずるのでなくて、むしろこの国民の意識と他の諸国民の實踐との間に、換言すれば（現在ドイツに於てのように）一国民の国民的意識と一般的意識との間に、生ずるということによつても起ることがある。——そのときこの国民にとつては、この矛盾が見たところ単に国民的意識の内部に於ける矛盾として現われるが故に、鬭争もまたこれらの[§§ 16]以下は、前頁からの続きの文であるがこの頁からは削除されている。】「国民的汚物に對してのみに限られるかの如く見えるのである。」蓋しまさにこの国民が即自對目的汚物であるからである。」*

尤も意識がひとりで何を始めようとそれは全くどうでもいいことである。我々はこの全汚物の中からただ次のような結論を、即ち、生産力、社会状態及び意識、これら三つ

の契機が互いに矛盾に陥ることが出来また陥らざるを得ないのは、分業の成立と共に、精神的活動と物質的活動とが、活動と思惟、つまり無思想的な活動と無活動的な思想とが、享樂と労働、生産と消費が、相異なる個人に帰属するという可能性、いな、現実性が与えられてゐるからであり、そしてそれらのものが矛盾に陥らないという可能性はただ分業が再び廃止されるということのうちにのみ存するからである、という結論を引き出せば足りるのである。然かのみならず『幽霊』、『紐帶』、『ヨリ高い本質』、『概念』、『危惧』なるものが単に、孤立せしめられたる個人の觀念論的な精神的表現であり、明かに表象であり、しかも生活の生産の仕方並びにそれと聯関する交通形態がその内部で動いてゐるところの極めて經驗的な諸桎梏と諸制限とについての表象であるに過ぎないということは論ずるを俟たないところである。△現存する經濟的諸制限のこの觀念論的な表現は啻に純粹に理論的にばかりでなく、また實踐的意識のうちにも存在する、即ち自己を解放しつつあるそして現存する生産の仕方と矛盾に陥つたところの意識は、單に宗教や哲学ばかりでなく、また国家を形成する。▽

これらの一切の矛盾は分業に於て与えられており、そして分業自身はまた家族内に於ける自然生的な分業と個々の互いに対立する諸家族への社会の分裂の上に基礎をもつものであるが、この分業の成立と共に、同時にまた分配が、しかも労働及びその生産物の不平等な量的並びに質的分配が与えられており、従つて財産が与えられている、この財

産なるものは、[§§b=17](#)）そこでは妻や子供たちが夫の奴隷であるところの家族に於て、既にその核子を、その最初の形態をもっているのである。家族内に於けるもとよりなお甚だ粗野にして潜在的な奴隷制は最初の財産であつて、しかもそれはこの場合既に、財産をもつて他人の労働力に対する処分権であるとするところの近代の経済学者たちの定義に完全に合致している。[（以下のエンゲルスの欄外書込みは挿入箇所指定がない）](#)尤も分業というも私有財産というもそれらは同一のことを表現するものである、——即ち、同じことが、前者に於ては活動に關係して言い表されており、後者に於ては活動の生産物に關係して言い表されているのである。——更に分業の成立と共に、同時に、個々の個人または個々の家族の利害と、互いに交通する凡ての個人の共同の利害との間に於ける矛盾が与えられている、しかもこの共同の利害は、『普遍的なもの』として、単に表象のうちに存在するが如きものではなく、却つて労働がその間に分割されているところの諸々の個人の相互的依存として先ず現実のうちに存在するのである。

[§§Ro](#)

[以下の長大な書き込みは特に挿入指定はないとのこと](#)

まさに特殊の利害と共同の利害とのこの

矛盾に基いて、共同の利害は、現実の個々の及び総体の利害から分離されて、国家として、一の独立なる態容をとる、そしてそれは同時に幻想的な共同性として現われるのであるが、しかしそれはつねに、各々の家族集団及び種族集団のうちに存在する紐帯の、即ち、血肉、言語、ヨリ大規模な分業、及びその他の利害の、——そして特に、後に至つ

て展開されるであろうように、分業によって既に制約されたる諸階級——それはあらゆるこの種の人間の衆団のうちに於て分化するものであり、且つその中の一つが他の凡てを支配する——の利害の、現実的な土台の上に立っているのである。ここからして論結されることは、国家の内部に於ける一切の闘争、即ち、民主政治、貴族政治及び君主政治の間の闘争、選挙権等々のための、**一般的にいえば普遍的なもの——共同的なもの**の**幻想的な形態**（この挿入箇所は異論あり）——のための闘争は、種々なる階級相互の現実的な諸

闘争がそのうちに於て行われるところの幻想的な諸形態以外の何物でもないということ（この点について、ドイツの理論家たちは、我々が彼等に『独仏年誌』及び『神聖家族』の中でそれに対する手引を十分に与えておいたにも拘らず、少しもわかっていない）、そして更に、凡て支配に向つて努力しつつある階級は、プロレタリアートの場合に於ての如く、その階級の支配が全体の旧き社会形態**並びに支配一般**の廃棄を制約する場合と雖も、自己の利害をまた一般的利害として表現する——いずれの階級も最初の瞬間に於てはかくすべく余儀なくされるのである——ために、先ず政治的権力を奪取しなければならぬということである。個人はただ彼等の特殊なものを、彼等にとつて彼等の共同の利害と合致しないものを求めるが故にまさに、このものは彼等にとつて『外的な』且つ彼等から[Rc]『独立な』利害として、一のそれ自身また特殊な且つ特有な『一般』・利害として主張されるのである、さもなくば彼等自身が、民主政治に於ての如く、この

ような分裂に於て出会わねばならない。ところで他方ではまた、共同の利害若くは幻想的な共同の利害に絶えず現実的に対立しているこれらの特殊利害の間の実践的な闘争は、国家としての幻想的な『一般』・利害による実践的な干渉と制御とを必要ならしめるのである。——/RcI

[b=17 続き] そして最後に分業は直ちに次のことについての最初の実例を我々に提供する、即ち、人間が自然的な社会のうちに存在している限り、従つて特殊の利害と共同の利害との間の分裂が存在している限り、従つて活動が自由意志的でなく、むしろ自然的に分割されている限り、人間自身の行為は彼にとって一の外的な対立的な力となる、彼がそれを支配するのでなく、却つてそれが彼を抑圧するような力となるのである。即ちこうである、労働が分配され始めるや否や、各人は、彼に強制せられそれから彼の抜け出ることの出来ぬ一定の、**専門的な活動の範囲をもつ**、彼は狩猟者であるか漁撈者であるか、それとも牧者であるか**それとも批判的批判家**であるかであり、そして彼が生活のための手段を失うことを欲しない以上、どこまでもそれでいなければならない、——これに反して共産主義的社会にあつては、そこでは各人が専門的な活動の範囲というものをもたず、却つてあらゆる任意の部門に於て修養することが出来、社会が全般の生産を規制するのであるからして、まさにそのために私は、嘗て狩猟者や漁撈者、または牧者**または批判家**となることなしに、私の気の向くままに、今日はこれをし、明日はあれ

をし、朝には[△]靴屋[△]をして[△]昼には[▽]午後には庭師、夕方には俳優になる[▽]狩し、午後には漁り、夕には家畜を飼ひ、また食事を批判することが可能にされる。^{②③④18}社会的活動のこのような固定化、我々自身の生産物の、我々の手におえなくなり我々の期待をあてなしにし我々の計算を台無しにするところの我々におおせかかる物的強力へのこのような固結化こそは、従来の歴史的発展に於ける主要契機の一つである。[△]そしてそれは、財産——このものは当初は人間自身によつて実施された——制度であるが、程なく社会に對してひとつの固有な、その創始者たちによつて決して意図されていなかった転向を与える——に於て、何人にとつても、彼にしてかの『自己意識』若くは『唯一者』に頭を突き込んでしまつていない限り、明瞭に看取され得ることである。▽

^{②③④}Re 以下は挿入指定もなくメモか^② 共産主義は我々にとつて、作り出さるべきひとつの状態、現実がそれに則るべきひとつの理想ではない。我々は今の状態を止揚する現実的な運動を共産主義と呼ぶ。この運動の諸条件は今現存する前提から生れる。^{②③④⑤}Re

社会的な力、即ち分業に於て制約されたる種々なる個人の協働によつて生ずるところの倍加された生産力は、この協働そのものが自由意志的でなく、却つて自然生的であるために、これらの個人にとつては、彼等自身の、結合された力としてでなく、却つて一外的な、彼等の外に立つ強力として現われる、この強力について彼等は、何処から来て何処へ行くかを知らず、従つて彼等はそれをもはや支配することが出来ない、反対に


それは今や一の固有なる、人間の意志と実行とから独立なる、いな、この意志と実行とをあたかも支配するところの一系列の様相と発展段階とを歴進してゆくのである。

Ⓔ Rcy このような、哲学者たちにわかる言葉を使えば、『自己疎外』は、言うまでもなくただ二つの実践的前提のもとに於てのみ排棄されることが出来る。それが一の『堪え難き』力、即ちそれに対してひとが革命するような力となるためには、それが人間大衆を全くの『無産』者として生み出し且つ同時にそれを現存する富と教養の世界に対する矛盾に於て生み出すことが必要である、しかるに富と教養なる二つのものは生産力の偉大なる増大——その高度の発展を前提する——、そして他方に於て、このような生産力の発展（それと共に同時に、既に、人間の地方的な定在のうちに存する経験的存在の代りにその世界的な定在のうちに存する経験的存在が与えられている）は、次の如き理由からしてもまた一の絶対に必要な実践的前提である、というのは、このような生産力の発展なくしてはただ缺乏が一般化されるばかりであり、それ故に窮乏に伴つてまた必需品を得るための闘争が再び開始され、かくて一切の古き汚物が再び作り出されねばならぬであろうからであり、更になお、諸生産力のこのような世界的な発展があればこそ人間の世界的な交通があるのであり、従つて一方では『無産』大衆なる現象をあらゆる民族のうちに時を同じうして生み出し（一般的競争）、そのいずれの民族をも変革の影響を免れぬものとなし、そして終に地方的な個人の代りに世界史的な即ち経験的に普

遍的な個人を置き換えたからである。このことなくしては、第一に、共産主義は単に地方的なものとして存在し得るに過ぎないであろうし、第二に、交通の諸々の力そのものは世界的な、従って堪え難き力として発展することが出来ず、いつまでも郷土的・迷信的な『事情』としてとどまっているであろうし、そして第三に、交通のあらゆる拡張は地方的な共産主義を廃棄するであろう。共産主義は、経験的には、支配的な諸民族の行為として一時に且つ同時にでなければ可能でないものであつて、それには生産力の世界的な発展及びこれと関聯する世界交通が前提せられるのである。

〔Rd〕なおまた、無産労働者大衆は——大量的に資本若くは或る僅かの欲望満足から切り離された労働力は——従つてまたもはや一時的なものではないところのこの労働の喪失は、保証された生活の源泉としての労働の競争にもとづくこの純粹に不安定な状態は、世界市場を前提している。それ故にプロレタリアートはただ世界史的にのみ存在し得ること、あたかも共産主義が、その行動が、ただ『世界史的』存在としてのみ一般に存在し得るのと同じである。それは個人の世界史的な存在、即ち個人の直接に歴史と結びついているところの存在である。〔Rd〕

〔C 続き〕さもなければ如何にして、例えば財産制は一般に歴史をもち、種々なる形態を採り得たであろうか、また土地私有の如き、如何にして、存在する諸前提の相異なるに依つて、今日実際に見るように、フランスでは土地細分から少数者の掌中への集中に向つ

て、イギリスでは少数者の掌中に於ける集中から土地細分に向つて推し進み得たであらうか。或いは、如何にして、もともと種々なる個人や国々の生産物の交換にほかならないところの商業が、需要供給の關係を通じて、全世界を支配するというのが起るであらうか。——この需要供給の關係たるや、イギリスの一經濟學者の言える如く、あたかも古代の運命の神と同じように地上に浮動し、見えざる手をもつて幸福と不幸とを人間に向つて振り当て、 161 国を建てまた国を滅し、民族を興起せしめまた衰亡せしめる——これに反して、その土台たる私有財産の廢止されるや、生産が共產主義的に規制され、それに伴つて、人間が彼等自身の生産物に対して立つところの外的關係が撲滅されるや、需要供給の關係のもつ力は無に歸し、かくて人間は交換や生産や彼等の相互に關係し合う仕方やを再び彼等の支配のもとに収めるのである。

従來の凡ての歴史的段階に存在せる諸生産力によつて制約されていると共に逆にそれらを制約しているところの交通形態は市民的社會である、このものは、それに先行するものから生れ出る以上、単一家族制や大家族制、いわゆる種族制を自己の前提としてきた基礎としてもつており、その詳細な諸規定はそれに先行するもののうちに含まれている。既にここに於て、この市民的社會が一切の歴史の眞の中心であり舞台であるということ、そして専ら主權者及び國家の仰々しい行動のみを見て、現実的な諸關係を閑却している従來の史觀が如何に不合理なものであるかということ、は明かである。

これまでのところ我々は主として、単に人間的活動の一面を、即ち人間による自然への働きかけのみを観察して来た。いまひとつの方面、即ち人間による人間への働きかけ

国家の起源及び国家と市民的社会との関係。



歴史というのは個々の諸世代の継起にほかならぬものであつて、それら諸世代のいずれもは、自己に先行したる凡ての世代から自己に譲渡されたところの諸材料、諸資本、諸生産力を利用する、従つて一方では、伝承された活動を全然變化された諸事情のもとに継続し、そして他方では、旧來の諸事情を全く變化された活動をもつて改変するわけである、ところがこの事実が思辨的に曲歪されるに至り、かくて後代の歴史が前代の歴史の目的となされる、即ち、例えばアメリカの発見の基礎にフランス革命の勃発を助成するという目的がおかれるのである、このような仕方によつてそのとき歴史はそれの別個独立な諸目的をもたされることとなり、『他の諸人格（というのは、そこには『自己意識、批判、唯一者』等々がある）と並ぶ一人格』となることとなる、しかるに、前代の歴史の『使命』、『目的』、『胚種』、『理念』なる言葉で呼ばれるところのものは、後代の歴史からの抽象以外の何物でもなく、前代の歴史の後代の歴史の上に及ぼす能動的影響からの抽象以外の何物でもないのである。――さてこのような発展の過程に於て、相互に働きかけ合う個々の諸団体がその範圍を拡大すればするほど、個々の諸国民の原始的な孤立性が發達せる生産の仕方、交通並びにそれらによつて**自然生的**に作り出された**種々なる国民の間に於ける分業**によつて、破壊されることが多ければ多いほど、愈々多く歴史は世界史となる、そのために、例えば、イギリスでひとつの機械が發明される

とき、この機械は印度や支那に於て無数の労働者を路頭に迷はせ、これらの国の全存在形態を変革するのであつて、かくしてこの発見は一の世界史的事実となる、或いは、砂糖と珈琲とは、ナポレオンの大陸政策によつて生じたこの二つの生産物の缺乏がドイツ人を(9b=21)駆つてナポレオンに対して反逆するに到らしめ、もつて一八一三年の光輝ある独立戦争の現実の土台となつたということによつて、十九世紀に於てその世界史的な意義を証明したのである。ここからして結論されるのは、歴史の世界史へのこのような転化が『自己意識』、**世界精神**、またはその他の或る形而上学的な幽霊のひとつの単に抽象的な行為というのが如きものでなく、却つてひとつの全然物質的な、經驗的に示され得る行為であるということである、この行為たるや、それに対しては、歩いたり立ったり、食つたり飲んだり、着たりするがままの個人の誰もがその証明を供している。へ*
聖マックス・スチルナー自身は世界史を背負ひ廻り、その昔我等の主エス・キリストの肉を喰ひ血を飲んだように、毎日世界史を喰ひ且つ飲んでゐる。そして世界史は、彼を、『彼自身の生産物』であるところの唯一者を、日々再生産する、というのば彼が喰ひ、飲み且つ着なければならぬからである。『唯一者云々』の中に於ける諸引用文、並びにベツス及び他の遠く離れた人々に対する聖マックスの辯駁は、如何に彼が精神的にもまた世界史によつて生産されてゐるかを証明してゐる。それ故に結論は、個人は『世界史』のうちに於ても、学生と自由な裁縫女とからなるいずれの「スチルナー協会」のう

「ちに於てと同様、まさに同じ、『所有者』であるといふことになる。＊」尤も、従来の歴史に於ては次のことも等しく一個の経験的事実であるのは確かである、即ち、個々の個人は、その活動が世界史的な活動にまで拡大するに伴つて、愈々益々、一の彼等にとつて外的な力のもとに（この力の重圧を彼等はそもそもまたいわゆる世界精神等々の詭計として表象した）隷属させられて来た、この力たるや、絶えずヨリ大量的になつてゆきそして最後には世界市場として現われるのである。併しながらまた、ドイツの理論家たちにとつていとも神秘的なこの力が、現存する社会状態の顛覆によつて、共産主義的革命（これについては更に後段に述べる）及びそれと同一事なる私有財産の廃止ということによつて、解消せられ、そしてそうした場合、各々の個々の個人の解放が、歴史が完全に世界史に転化する程度に應じて、実現されるということも同様に経験的に基礎付けられていることである。個人の現実的に精神的な富が全く彼の現実的な諸関係の富に依存するということは、上述のことによつて明瞭である。個々の個人はこれによつて初めて、種々なる国民的及び地方的制限から解放せられ、全世界の生産と（精神的生産ともまた）実践的な関係におかれ、そして全地上界のこの全面的な生産（人間の諸創造）に対する享受力を獲得し得る状態におかれるのである。個人の全面的な依存、その世界史的な協働のこの自然生的な形態は、〔9c=22〕この共産主義的革命によつて転化されて、人間の相互作用から生れたものでありながら従来全然外的な力として彼等に威圧を加へ

且つ彼等を支配し來つたこれらの力の統制、その意識的な支配となる。ところでこの直観がまた思辨的に、觀念論的に、即ち空想的に『種の自己生産』（『社会と主観』）として把握され、そしてそれによつて相關聯し合う諸々の個人の繼起的系列が、自己自身を生産するという不思議を行うところの唯一個人として表象されることがあり得るのである。ここに明かであるように、個人は確かに、物理的にも精神的にも、相互に作り合うが、しかし自分で自分を作るものでない、それは聖ブルーノのナンセンスに於ても不可能である、このナンセンスに従えば、＊『人格の概念のうちには、一般に、自己自身を制限されたものとして措定し（このことに於ては彼は立派に成功している）、そして、人格が（みずからによつてではなく、また一般にでもなく、またその概念によつてもなく）、むしろその普遍的な本質によつて措定する――蓋しまさしくこの本質こそは人格の内面的な自己差別の、その活動の結果であるに過ぎないからである――この制限を、再び排棄するということが含まれている。』八七―八八頁、（ブルーノ君は「ダーヌまでは作ることが出来ていない。」）またそれは『唯一者』の、『作られた』人間の意味に於てもそうでない。＊――〔以上の削除はマルクスによる。訳出されていないが改行してさらに、一文ある。〕

最後に、我々はここに展開された史観からなお次の如き諸結果を得る。即ち、一、諸生産力の発展に於てひとつの段階が、そこでは、現存する諸関係のもとに於てただ禍害

を惹き起すばかりでもはやなんら生産力でなく却つて破壊力であるような諸生産力及び交通手段（機械及び貨幣）が作り出されるような段階が、出現する——そしてそれと関連して、社会の諸利益を享受することなくしてしかも社会の一切の重荷を負わねばならぬところの、社会から推し出されて、**⑨d=23**）他の凡ての階級に対する最も決定的な対立に迫りやられるところの、一階級が作り出される。この階級たるや、それをば全社会成員の大多数が構成し、それからして一の根本的な革命の必然性についての意識、即ち共産主義的意識が出て来る、この意識は、言うまでもなく、この階級の地位を理解することによつて、他の諸階級の間にもまた形作られ得るものである。二、一定の諸生産力がその内部に於て充用され得るところの諸条件は、社会の一特定階級の支配の諸条件である、そしてこの特定階級の社会的な、その所有にもとづいて生ずる力は、その時々国家形態に於てその実践的・観念論的表現をもっている、それだからあらゆる革命的闘争は、従来支配し来った階級に対して向けられるのである。**（この箇所の欄外に「人々は今日** **の生産体制を維持することに関心を持つていると言ふこと」**）三、従来の凡ての革命に於ては、活動の様式にはつねに手を触れられることなくそのままであつて、単にこの活動の或る違った分配が、違った人々への労働の新たな割当が問題であつただけである、これに反して共産主義的革命は従来の活動の様式に対して向けられ、労働を廃除し、あらゆる階級の支配を階級そのものと共に排棄する、蓋し共産主義的革命は、かの階級に

よつて、即ち社会に於てもはやなんらの階級とも見做されず、階級として承認されず、既に**今の社会の内部に於て一切の階級、国籍、等々の解消の表現であるところの階級**によつて遂行されるからである。そして、四、この共產主義的意識の大量的産出のために、もまた共產主義それ自体の貫徹のためにも、ただ実践的運動に於てのみ、革命に於てのみ起り得るところの人間の大量的な変化が必要である。それ故に革命は、支配階級が他の如何なる仕方によつても打倒され得ないという理由から必要なばかりでなく、また打倒する側の階級がただ革命に於てのみ、一切の古き汚物を払い退け、もつて社会の新たな建設に必要な能力を賦与されることが出来るが故に必要なのである。

[10a この頁は、次の頁の最初の行まで全面削除されている。改稿されて第二篇にまわされた。]
[10b=24]

この史観はそれ故に次の点に拠つて立つてゐる。それは、即ち、現実の生産過程を、しかも直接的な生活の物質的生産から出発して、展開することであり、そしてこの生産の仕方と聯関しており且つそれによつて作り出された交通形態を、従つてその種々なる段階に於ける市民的社會を**全歴史の基礎として把握することであり、また市民的社會を国家としてのその行動に於て叙述すると共に、意識の種々なる理論的所産及び形態の凡てを、即ち、宗教、哲学、道德学等々を市民的社會から説明しそして市民的社會の成立過程をそれらのものから跡づけることである。**このようにするときには当然にまた事物はその全体性に於て（そしてそれ故にこれらの種々なる方面相互の間の交互作用もまた）叙述され得るのである。この史観は各々の時代に於て、觀念論的史観のように、ひとつの範疇を求めることを要することなく、却つて絶えず現実的な歴史の地盤の上に立ちとどまり、実践を觀念から説明せずして、諸觀念形成を物質的実践から説明する、従つてそれはまた次の如き結論にも到達する、即ち、意識のあらゆる形態及び所産は、精神的批判によつて、換言すればそれらのものの『自己意識』への解消若くは『妖怪』、『幽霊』、『狂妄』等々への転化によつてではなくして、却つてただこれらの觀念論的愚論がそれから生れ出ている実存的な社会的諸關係の實踐的倒壊によつてのみ解消され

得るものであり、批判ではなく、革命が、歴史の、また宗教、哲学及びその他の理論の推進力であるのである。この史観の示すところは、歴史は自己を『精神の精神』としての『自己意識』に解消することをもつて終るのでなく、むしろ歴史に於ては、そのいずれの段階にあつても、一の物質的成果が、諸生産力の一総和が、**自然に對する並びに個人相互の間の歴史的に形成されたる關係**が、既に存在しており、それらのものは、各々の世代にこれの先行者から伝えられるのであつて、即ち一の大量の諸生産力、諸資本及び諸事情がこれにほかならず、それらのものは一方ではもとより新しい世代によつて改変されはするが、しかし他方ではまた新しい世代に對してそれ自身の生活諸条件を指定し、そして新しい世代に一定の發展を、一の特殊な性格を与えるということであり、従つて**（Hörsing）**人間が環境を作ると同様に環境が人間を作るということである。**いずれの個人**、いずれの世代もが与えられた或るものとして見出す諸生産力、諸資本及び諸社会的交通形態のこれらの総和は、哲學者たちが『実体』としてまた『人間の本质』として表象して来たところのもの、彼等が神化しそしてそれと闘つて来たところのものの実存的な基礎であり、これらの哲學者たちが『自己意識』としてまた『唯一者』としてそれに對して反逆することによつては、聊かたりとも人間の發展の上に及ぼすその作用や影響に於て妨げられることのない実存的な基礎である。種々なる世代のこれらの所与の生活諸条件はまた、歴史に於て周期的に繰り返えされる革命的動搖が、一切の現存す

るものの土台を顛覆するに足るだけ強力であるであろうか否かをも決定する、そして若しも總体的な変革のためのこれらの物質的な諸要素にして、即ち、一方では種々なる生産力、他方では単に従来の社会の個々の諸条件に対してばかりでなく、むしろ従来の『生活の生産』そのもの、この土台をなす全活動に対して革命を行うところの革命的大衆の形成にして、存在していないならば、かかる変革の觀念が既に百度も宣言されていようといまいと、実践的な発展にとつては全くどちらでもいいことである——あたかも共産主義の歴史がこれを証明している。

従来の凡ての史観は、歴史のこの現実的な土台を全然顧慮せずにおいたか、さもなければ、単にそれを歴史の過程とは全くなんらの關聯をもたぬ一の附隨物と見做して來た。それだから、歴史はいつも、歴史の外に横たわれる規準に従つて記述されざるを得ず、現実的な生活の生産が非歴史的なものとして現われ、これに反して歴史的なるものが普通の生活から離れた格別超世俗的なものとして現われるのである。このようにして、人間の自然に対する關係は歴史から除外され、それによつて自然と歴史との対立が作り出される。従つて、従来の史観は、歴史のうちにただ主權者及び國家の政治的諸行動と宗教的な、一般に理論的な諸鬭争とを見ることが出來ただけであり、そして特に、いずれの歴史的時代についてもこの時代の幻想をこの時代と共にせざるを得なかつたのである。例えば、或る時代が、『宗教』や『政治』はこの現実的な諸動機であるものの單

に形式であるに過ぎぬにも拘らず、純粹に『政治的な』若くは『宗教的な』諸動機によって規定されていると想像しているときは、その時代の歴史家はこの意見を受け容れる。これらの特定の人間が自己の現実の實踐について懐く『想像』、『表象』が転化されて、これらの人間の實踐を支配し規定するところの唯一的に規定的なそして能動的な力になる。インド人やエジプト人にあつて行われている分業の粗野な形態が、これらの民族の間に於て、その国家やその宗教のうちにカスト制度を作り出すとき、歴史家は、カスト制度こそは **[Hod=26]** この粗野な社会的形態を産み出した力である、と信ずる。フランス人やイギリス人は、少くとも、現実とまだしも最も近い關係にある政治的な幻想に執っているのに、ドイツ人は『純粹精神』の領域のうちにさまよい、宗教的な幻想をもつて歴史の推進力となしている。ヘーゲルの歴史哲学は、ここでは現実的な利害が、政治的な利害でさえもが問題とされずして却つて純粹な思想が問題とされているこのような凡てのドイツ的歴史叙述の最後の、その『最も純粹な表現』にまで持ち来された帰結である。この歴史叙述は次にまた**聖ブルーノ**にとつても、その**一思想が他の思想を食い盡し、かくて『自己意識』**のうちに遂には没落してゆくところの諸思想の一系列として現われた、そしてなお**一層徹底的**には、凡ての現実的な歴史について何事も知らぬ**聖マックス・スチルナー**にとつては、この歴史的過程は単なる『騎士』の、『盜賊』の、幽霊の歴史として現われざるを得なかつたのであつて、そのような諸幻覺に対しては、彼は

言うまでもなくただ『不信心』によつてのみ自己を救うことを辨えている。この見解は実際に宗教的である、それは宗教的人間をば一切の歴史の出発点たる原人として想定し、そしてその想像の中に於て、生活資料及び生活そのものの現実的生産の代りに宗教的な空想生産を置くのである。この全史観、並びにその解体及びこの解体から生ずる懷疑と危惧は、ドイツ人の単に国民的な関心事であつて、ドイツにとつての地方的な利害しかもつていない、例えば、どうしてひとはそもそも『神の国から人間の国に来るか』という、あの重要な、近頃頻りに議論された問題の如きがそれである、あたかも、この『神の国』は想像の中にでなくそれ以外の何処かに嘗て存在したことでもあるかの如き、そして学者先生たちは、今彼等がそこへの道を尋ねている『人間の国』の中に、自分では気がつかずに、絶えず生活して来たというのでないかの如き口吻であり、またあたかも、この理論的雲霧形成の珍現象を説明するという科学的遊戲——蓋しそれはこれ以上のものではない——というものは、まさに反対に、この理論的雲霧の成立が現実的な地土的な諸關係からして実証されるところに存するのでないかの如き口吻である。一般に、これらのドイツ人にあつてはつねに、[IIa=27]与えられたものとして見出されるナンセンスをなんらかの他の幻想に解消するということ、換言すれば、この全ナンセンスがとにかく、探り出されねばならぬ一の別個独立な意味をもっていると前提するということが問題になっている、しかるにまことはこれらの理論的空語をば現存する現実的な諸

關係から説明することのみが問題なのである。これらの空語を現実に実践的に解消すること、これらの表象を人間の意識から排除することは、既に云つたように、變化された諸事情によつて成就されるのであつて、理論的演繹によつて成就されるのではない。人間の大衆即ちプロレタリアートにとつては、このような理論的表象は存在しない、従つてまた彼等にとつては解消せしめられる必要もない、そしてこの大衆が嘗て若干の理論的表象を、例えば宗教を、もつていたとしても、これらのものは今では既に疾に諸事情によつて解消されているのである。

これらの問題並びにその解決がまがいもなくこの国民独特なものであることはなおまた次の如き点にも現われている、即ち、これらの理論家たちは一生懸命で、『神人』とか『人間』とかいう諸妄想物が歴史の個々の時代を主宰したかのように信じており、――聖ブルーノに至つては、それどころではない、ただ『批判及び批判家が歴史を作つた』かのように主張するところまで行つてゐる――そして、彼等が自分自身で歴史的諸構成に従事する場合には、以前の時代のことは一切最大急行で飛び越えてしまつて、『蒙古人時代』からすぐさま本来『内容に充ちた』歴史へ、即ち、ハレ年誌並びにドイツ年誌の歴史及びヘーゲル学派が解体して一般的な喧嘩となる歴史へ、と移つてゆくのである。あらゆる他の国民、あらゆる現実的な事件は忘れられ、世界風俗芝居はライブチツヒの書籍市及び『批判』と『人間』と『唯一者』の相互の間の紛争に局限される。

若し理論が恐らく時あつて現實に歴史的なテーマを、例えば、十八世紀を取扱うことに従事するような場合には、それは単に諸表象の歴史を、これらの諸表象の基礎に横たわる諸事実及び実践的な諸發展から切り離して、与えるに過ぎず、しかもこの歴史とて、ただ、この時代をば眞の歴史的時代、即ち一八四〇年から一八四四年に至る間のドイツ哲學者戦争の時代のひとつの不完全な前段階として、そのなお局限されたる先驅者として叙述しようという意図のもとに於て、与えられるに過ぎない。ひとりの非歴史的人物及び彼の空想の声価を愈々赫々と輝かしめんがために、以前の時代の歴史を書くというこの目的にとつては、一切の現實的に歴史的な事件、現實的に歴史的な政治上の事件でさえもが、歴史の中で閑説されないので、その代りに研究にもとづかず構想と文学的なゴシップの歴史とにもとづくところの物語が与えられる——丁度聖ブルーノがこのことを彼の今は忘れられている十八世紀の歴史の中でやつてゐる——ということは、いかにも適つたことである。かくして、あらゆる國民的偏見を無限に遠く超脱してゐると信じてゐるこれらの高踏的で尊大な思想商人たちは、實踐に於ては、ドイツの統一について夢みる月並の俗人たちよりもなお遙かに國民的である。彼等は他の諸民族の行動をば歴史的だとは全然認めない彼等はドイツの中に、むしろドイツという小地域に、[11b=28]そしてドイツのために生きている、彼等はラインの歌を讚美歌に変え、そして、フランス國家の代りにフランス哲学を盗み、フランスの地方の代りにフランスの思

想をゲルマン化することによって、エルザスとロートリンゲンを占領する。理論の世界支配に於てドイツの世界支配を宣言する聖ブルーノーや聖マックスに比べてはヴェネディ君の方がコスモポリタンである。〔**IIb** この頁は、以下は縦線で削除され第2篇ブルーノーに〕

〔**IRb**〕 これらの論述からしてまた、フォイエルバッハが（ヴエガント四季誌一八四五年、第二巻）自分をば『公共人』という資格のために共產主義者だと宣言し、自分をば人間『なるもの』という一賓辞に転化するとき、従つて、現存する世界では特定の**革命的な**党の所屬者を現わす共產主義者なる語を、再び一の單なる範疇に転化し得ると信ずるとき、如何に甚しく彼が思い違いをしているか、ということが明かにされる。人間相互の關係に關してのフォイエルバッハの全演繹は、ただひとえに、人間は相互に必要とし合ひ、且つつねに必要とし合つて來たということを証明するだけに終つてゐる。彼はこの事實についての意識を確立せんと欲する、従つて彼は、爾余の理論家たちと同じように、單に、現存する事實についての正しい意識を作り出そうと欲しているに過ぎない、これに反して現実的な共產主義者にとつては、この現存するものを変革することが問題なのである。尤も我々はフォイエルバッハが、まさにこの事實の意識を作り出そうと努力することによつて、理論家が一般に、理論家や哲學者であることをやめることなしに、進み得るところの限度まで進んでいるということを完全に承認する。しかるに注目すべきことには、聖ブルーノー及び聖マックスは、共產主義者についてのフォイエルバッハ

の表象をばすぐさま現実的な共產主義者に書き換えている、そしてこれは、**一部の理由**としては既に、彼等が共產主義をもまた『精神の精神』として、哲学的範疇として、同格の敵手として、これと闘争し得んがためになされているのである——そして聖ブルーノの側からは、それはなおまた實際上の利害からしてもなされているものである。フオイエルバッハがなお依然として我々の敵たちと共通にやっている現存するものの承認及び同時に誤認の例として、我々は『将来の哲学』の中の次の箇所のことを指摘しよう、そこに於て彼は、事物若くは人間の存在は同時にその本質であるということ、動物的若くは人間的個体の一定の**生存諸関係**、生活の仕方及び活動は、その個体の『本質』がその中に於て自分が満足させられるのを感じているところのものであるということ、を説述している。この場合明らかに、いずれの例外も不幸なる偶然として、変更され得ない変態として考えられているのである。それ故に、幾百万のプロレタリアが彼等の生活諸関係の中に於て決して満足させられるのを感じないとき、彼等の『存在』が彼等の………とや。/[II Rb] {引き続きの右欄書き込みは、この時は未発見だった。}

{[I Ic=29] [I Id] は、1962年見つかる。いずれも本文側は全面削除、右覧にエンゲルスの書き込みの続き有り}

{20a 次の頁の始めまで縦線で消去されている。清書されて第三章マックスに使われた。}

{20b=30}

支配階級の思想はいずれの時代に於ても支配的な思想である、換言すれば、社会の支配的な物質的力であるところの階級が同時にその社会の支配的な精神的力である。物質的生産のための諸手段を支配する階級は、それによって同時に精神的生産のための諸手段を支配し、かくして、それによって同時におしなべて、精神的生産のための諸手段を缺ける人々の思想はこの階級に隷従せしめられることとなる。支配的な思想とは、畢竟、支配的な物質的諸関係の観念的表現であり、思想として把握されたる支配的な物質的諸関係、即ちまさにその一階級をして支配階級たらしめる諸関係であり、それ故にこの階級の支配の思想にほかならないのである。支配階級を構成するところの個人は、就中また意識を有し、それだから思惟する、従つて彼等にして階級として支配し、そして歴史上の一時代的全範圍を規定している限り、彼等がこの支配と規定とをその時代の全体に亘つて行い、それ故に就中また思惟する者として、思想の生産者として支配し、彼等の時代の思想の生産及び分配を統制するということ、かくして彼等の思想がその時代の支配的な思想であるということ、は自明のことである。例えば、そこでは王権と貴族とブルジョアジーとが支配を争つており、従つてそこでは支配が分割されているような時代及び国に於ては、権力分立の学説が支配的な思想として現われ、それがやがて『永遠の法則』であると宣言されるのである。——我々が既に上に（〔本訳書六二

頁#35ページ）、従来の歴史の主要な力の一つとして見出したところの分業は、今やまた支配階級のうちに於て精神的労働と物質的労働との {200=31} 分業として現われ、その結果この階級の内部に於てその一部分はこの階級の思想家（この階級の自己自身についての幻想を作り上げることをもつて彼等の主要な生業とするところの、この階級の能動的な且つ概念的なイデオログたち）として出現し、これに反して他の部分はこれらの思想や幻想に対してヨリ多く受動的な且つ受容的な態度をとる、蓋し後者は現実に於てこの階級の活動的な成員であつて、自己自身についての幻想や思想を自分で作るためにヨリ僅かな時間をしかもたないからである。この階級の内部に於てはそれのこのような分裂は、二つの部分の間の或る程度の対立と敵対関係とにさえまで発展することがあり得る、けれどもこのような対立や敵対関係は、この階級そのものが危くされるような実践的衝突の場合にはいつでも、おのずからなくなり、そしてその場合にはそもそも、支配的な思想が支配階級 of 思想でなくそしてそれがこの階級の力とは別な力をもつているかの如き外観も消え失せるのである。一定の時代に於ける革命的思想の存在は既に革命的階級の存在を前提する、この階級の存在の諸前提については既に上に（〔本訳書七三頁#47～48ページ〕）必要なことは述べておいた。いまもしひとが、歴史的過程の把握に際して、**支配階級の思想を支配階級から切り離すならば、それを独立化するならば、**或る時代に於てこのまたかの思想が支配したと説く立場にとどまつてこのような思想の生

産の諸条件及び生産者たちのことを顧慮しないならば、従つて、思想の基礎に横たわつてゐるところの個人や世界事情をのがすならば、そのときにはひとは、例えば、貴族の支配した時代には名譽、忠節等々の概念が支配し、ブルジョアジーの支配の時代には自由、平等等々の概念が支配した、と云うことが出来る。→支配階級自身はおしなべて、彼等のこれらの概念が支配したという表象をもつており、そして彼等は、ただこれらの概念を永遠の真理として叙述することによつてのみ、これらの概念を以前の時代の支配的な表象から區別する。→これらの「支配的な概念」は、支配階級が自己の利害を社会の一切の成員の利害として叙述するように余儀なくされるが多ければ多いほど、愈々普遍的な且つ包括的な形態をもつてある。→支配階級自身はおしなべてこのように想像する。凡ての歴史家に、特に十八世紀以来、通有なこの史観は、必ずや、**{20d=32}** 絶えず益々抽象的な思想が、即ち絶えず愈々普遍性の形態をとる思想が支配するようになつて来る、という現象にぶつつかるであらう。言い換えるならば、自己の前に支配してゐた階級に代つて現われるいずれの新しい階級も、自己の目的を貫徹するために既に、自己の利害を社会の一切の成員の**共同の利害**として叙述するように、即ち、觀念的に表現すれば、自己の思想に普遍性の形式を与え、それを唯一的に合理的な、**普遍妥当的な思想**として叙述するように、余儀なくされてゐるのである。（普遍性は、

一、身分に対する階級に、二、競争、世界交通等々に、三、支配階級の数的に甚大なる

ことに、四、共同の利害の幻想に、照応している。当初はこの幻想は眞実であつた、五、イデオログたちの錯覺に及び分業に照応している。）革命的階級は、それがひとつの階級に對立するという理由から既に、階級としてでなく、却つて全社会の代表者として元來登場する、それは唯一つである支配階級に對して社会の全大衆として出現する。このことが可能であるのは、当初にはこの革命的階級の利害が、現實になおヨリ多く爾余の凡ての非支配階級の共同の利害と關聯しており、**從來の諸關係の圧迫のもと**になおいまだ一の特種階級の特殊の利害として發展し得なかつたからである。それだからこの階級の勝利は、爾余の、支配的地位に上つて來ない諸階級の多数の個人にとつてもまた利益になる、けれどもそれはただ、この勝利が今やこれらの個人をば支配階級にまで向上することが出来るようにする限りに於てである。フランスのブルジョアジーが貴族の支配を顛覆したとき、彼等はそれによつて多くのプロレタリアをして自己をプロレタリアトの地位以上に高めることを可能ならしめた、けれどもそれはただ、彼等がブルジョアとなつた限りに於てであつた。このようにしていずれの新しい階級も、從來支配して來た階級の土台よりもヨリ広い土台の上に於てのみその支配を成し遂げる、その代りにその後に至つては、今度支配する階級に對する非支配階級の對立もまたそれだけ愈々尖銳に且つ深刻に發展するのである。この二つの事柄によつて、この新しい支配階級に對して行われる闘争は、これもまた、從來の凡ての、支配の獲得に努力せる階級がこれをな

し得たよりも一層決定的な、一層根本的な[21a=33]、従来の社会状態の否定のために努力する、ということが制約されている。

一定の階級の支配がただ或る思想の支配であるに過ぎぬかの如きこのような全外観は、言うまでもなく、階級の支配が社会的秩序の形式であることを一般にやめるや否や、従つて、特殊な利害を一般的利害として、若くは『普遍的なもの』を支配的なものとして叙述することがもはや必要でなくなるや否や、おのずからなくなる。

支配思想にしてひとたび支配的な個人及び**わけでも生産の仕方の与えられたる段階から生れる諸関係から切り離され**、そしてそれによつて歴史に於てはつねに思想が支配するといふ結論が成立した後には、これらの種々なる思想から『思想なるもの』、**理念等々**を、歴史の中に於て支配しているものとして抽象すること、そしてかくして凡てのこれらの個々の思想や概念をば、歴史に於て自己を發展せしめつつある概念なるものの『自己規定』として把握することはいとも容易なことである。かくて次には**また人間のあらゆる関係が、人間の概念から、表象された人間から、人間の本質から、人間なるものから導き出され得る**といふことは当然である。このことは思辨哲学がなしたところである。

ヘーゲルは自分で『歴史哲学』の終りに、私は『概念なるものの進展をのみ考察し』そして歴史の中に於て『真の神義論』を叙述した(四四六頁)、と告白している。ひとは今やまたもや『概念なるもの』の生産者たちにまで、理論家たち、イデオログたち及

び哲学者たちにまで溯ることが出来る、そしてそのとき、哲学者たち、思想家たちがかるものとして、昔から歴史の中で支配して来たという結論に到達する、——この結論たるや、我々が見たように、また既にヘーゲルによつて言明されたところのものである。

〔ここに書き換えられた二文が削除されている〕かくて歴史に於て精神の主権（スチルナーにあつては**教権制**）を立証する**全手品は、次の三つの手練の範囲を出でない。**

§11b=34 この頁の始めは前頁から続いて削除されている〕

第一。ひとは、経験的な諸根拠にもとづき、経験的な諸条件のもとに於て、そして物質的な個人として、支配する人々の思想をこれらの支配する人々から切り離し、もつて歴史に於ける思想若くは幻想の支配を承認せねばならぬ。

第二。ひとは、この思想の支配に一の秩序を齎らし、相継起する諸支配思想の間に一の神秘的な聯関を立証しなければならぬ、そしてこれはひとがこれらの諸思想を『概念なるものの自己規定』として把握することによつて成し遂げられる（このことが可能であるのは、これらの諸思想がその**経験的な基礎を媒介にして現実的に相互に聯関しているからであり、且つこれらの諸思想が、単なる思想として把握されて、自己差別即ち思想家によつて搾えられた差別となるからである。**）

第三。この『自己自身を規定する概念』の神秘的な外見を取り除くために、ひとはそれをば一個の人格——『自己意識』——に転化するか、或いは、**全く唯物論的なるかに**

見えるために、それをば歴史に於ける『概念なるもの』を代表する一系列の人格に、即ち『思想家たち』、『哲学者たち』、『イデオログたち』に転化する、これらの人々は今やまたもや歴史の製造者として、『番人評議会』として、**支配者として**把握される。

(#) このようにしてひとは唯物論的要素を全部歴史から取り除いた、そして今やひとは彼の思辨の駒を安んじて疾駆させることが出来る。〔以下両者のよつて推敲された文が、次の頁まで

あるが縦線で削除されている。三木は訳出せず。〕

ドイツに於て(そしてその理由は?)特に支配せるこのような歴史の方法は、一般にイデオログたちの幻想、例えば、法律家、政論家(實際政治家をも含めて)の諸幻想との聯関からして、彼等の實際的な生活地位、彼等の職業及び分業から全く簡単に説明がつくところのこれらの連中の独断的な夢想と曲歪とからして、展開されなければならぬ。

(#) [このあたりに、「人間なるもの：『思惟する人間精神』」の欄外書き込み有り]

[21c 全面削除。三木は訳出せず。]

[21d=35 始めの行は前頁に続いて削除されている。三木は訳出せず。]

日常生活に於てはどんな商人でも、或る人が自稱するところとその人が現実にあるところとを區別することを甚だよく辨えているのに、我国の歴史叙述はなおこの平凡な認識にまで達していない。それは各々の時代が自己自身について語り且つ想像するところ

のものをその言葉通りに信じているのである。

〔以下両者のよって推敲された文、及び右覧注記も、削除されている。三本は訳出せず。また、マルクスの頁番号も265、266に
当たる原稿は無い。〕

〔B、唯物論的見方に於ける經濟、社会、個人及びその歴史〕
と云う表題が付けられているが文の途中から
始まっている〕

「……」第一のものからは、発達せる分業と拡大されたる商業の前提が生じ、第二のものからは、地方的性質が生ずる。第一のものにあつては個人は連繫されていなければならぬ、第二のものにあつては個人は与えられた生産要具と並んで自身生産要具として存在する。従つてここに、自然生的な生産用具と文明によつて作られた生産要具との間の區別が現われて来る。耕地、（水等々）、は自然生的な生産要具と見られることが出来る。第一の場合、即ち、自然生的な生産要具にあつては、個人は自然のもとに包摂され、第二の場合には労働の一生産物のもとに包摂される。従つて、第一の場合には財産（土地所有）もまた直接的な、自然生的な支配として現われ、第二の場合には労働、特に蓄積された労働の、資本の支配として現われる。第一の場合は、個人が、家族であれ、種族であれ、土地そのもの等々であれなんらかの紐帶によつて一共同体に結び合っていることを前提し、第二の場合は、彼等が互いに独立的であつてただ交換によつてのみ結合されていることを前提する。第一の場合に於ては、交換は主として人間と自然との間の交換であり、前者の労働が後者の生産物に対して交換されるところの交換であるが、第二の場合に於ては、交換は主として人間自身の間の交換である。第一の場合には平均的な人智で十分であり、肉体的活動と精神的活動とはなお全然分離されていないが、

第二の場合には既に精神的労働と肉体的労働との間の分業が**実践的に**成し遂げられていなければならない。第一の場合には所有者の非所有者に対する支配は人的諸關係に、**一種の公共組織に基礎を**おくことが出来るが、第二の場合にはそれはひとつの第三のもの、即ち貨幣に於て一の物的な容態をとつていなければならぬ。第一の場合には小産業が存在するが、しかしそれは自然生的な生産要具の利用のもとに包摂されており、従つて、種々なる個人への労働の割当なしに存在するものである、第二の場合には産業はただ分業に於てまた分業によつてのみ存立している。

{84b=41}

これまでのところに於ては我々は生産要具からして出発した、そして既にここに、或る産業上の段階にとつての私有財産の必然性が明かとなつた。採取産業に於ては私有財産は労働となお全く合致してゐる、小産業及び従来の凡ての農業に於ては財産は既存する諸生産要具の必然的結果である、大産業に於て初めて生産要具と私有財産との間の矛盾が大産業自身によつて作り出される、これが作り出されるためには大産業は既に非常に発展していなければならぬ。それ故に私有財産制の廃止もまた大産業と共に初めて可能となるのである。

—— ———— 物質的労働と精神的労働との最も大がかりな分業は都市と農村との

分離である。都市と農村との間の対立は、野蛮から文明への、種族制から国家への、地方割拠から国民への推移と共に始まり、そして文明の全歴史を通じて今日（穀物関税法反対聯盟）に至るまで始終存続している。——都市の成立と共に同時に、行政、警察、租税等々の、約言すれば**公共組織並びにそれと共に政治一般の必然性が与えられた**。此処に於て初めて直接に分業と生産要具とにもとづくところの、人口の二大階級への分割が現われる。都市は既に人口の、生産要具の、資本の、享樂の、欲望の集中の事実であるに對して、農村はまさに正反対の事実を、即ち孤立と隔離とを展示している。都市と農村との間の対立はただ私有財産制の内部に於てのみ存在することが出来る。それは、個人が**分業のもとにそして彼に強要された一定の活動のもとに包摂されていること**の最も顯著な表現であつて、この包摂たるや、或る者をば局限された都會動物に、他の者をば局限された田舎動物になし、そして両者の利害の対立をば日々新たに作り出すものである。労働はここでもまた主要事であり、個人にかぶさる力である、そしてこの力にして存在する限り、その限りは私有財産は存在せざるを得ないのである。都市と農村との対立の廃棄は、**[84c=42]** 共同社会の第一諸条件の一つであつて、この条件たるや、誰でも一瞥してわかるように、それ自身また、単なる意志だけでは充し得ない数多の物質的前提に依存している（これらの条件についてはなお詳論されねばならぬ）。都市と農村との分離は、資本と土地所有との分離として、資本即ち單に労働と交換とにその土台

をもつ一財産の土地所有から独立したる存在と發展との端初として、把握されることが出来る。

へ今や我々の例に移ろう。↓中世に於て、以前の歴史から出来上つたものとして伝えられたのではなくて、自由になつた農奴をもつて新たに形作られたところの諸都市にあつては、各人が携えて来た僅かばかりの、殆どただ是非なくてはならぬ手道具から成る資本を除けば、各人の特殊な労働が彼の唯一の財産であつた。絶えず都市へ流れ込んで来る逃亡した農奴たちの競争、諸都市に対する農村の絶えざる戦争、そしてそれに伴う都市に於ける組織された兵力の必要、一定の労働に対する共同所有權の紐帶、手工業者が同時に商人でもあつた時代であるので彼等の商品を販売するための共同の建築物の必要、並びにそれに伴うて生ずる、これらの建築物からの無資格者の閉め出し、個々の手工業相互の間の利害の対立、労力をかけて修業した労働の保護の必要、及び全土の封建的組織、これらが各々の手工業の労働者たちを同業組合に結合せしめるに至つた諸原因であつた。我々はこのここでは、その後の歴史的發展によつて惹き起された同業組合制の幾重もの改変にこの上立入つて論ずることを要しない。農奴の都市への逃亡は中世全体に亘つて間断なく行われた。これらの農奴たちは、農村で彼等の領主たちから迫害されて、個々別々に諸都市へやつて来たが、そこには組織されたる公共団体が既に存在していて、それに対しては彼等は無力であり、そこでは彼等は彼等の労働に対する需要と都市に於け

る組織されたる彼等の競争者たちの利害とが彼等に指定した地位に服せざるを得なかつた。これらの個々別々に流れ込んで来る労働者たちはいつまでたつても一勢力となることが出来なかつた、というのは、彼等の労働が修業される必要のある同業組合的な労働であつた場合には、組合の親方たちが彼等を自分たちに隷属させて、自分たちの利害に従つて彼等を組織したし、そうでなくて、彼等の労働が修業される必要のないものであり、従つてなんら同業組合的な労働でなくて日傭労働であつた場合には、彼等は決して一組織をなすに至らずして、いつまでも未組織の賤民層であつたからである。諸都市に於ける日傭労働の必要が賤民層を作つた。——これらの諸都市は、{840=43} その個々の成員の財産の保護並びに生産手段及び**防衛手段**についての世話を倍加するという直接の必要によつて生み出されたところの紛う方なき『組合』であつた。これらの諸都市の賤民層は、互いに見も知らぬ、個々別々に流れ込んで来た個人から成つており、しかもこれらの個人は、組織された、武装せる、彼等を鵜の目鷹の目で監視する力に対してなんらの組織をもたずに対立していたために、あらゆる力を缺いていた。職人たちと徒弟たちとは、いずれの手工業に於ても、親方たちの利害に最もよく合致するような具合に組織されていた。彼等が彼等の親方たちに対して立つていた家長制的関係は、親方たちに二重の力を与えた、即ち、一方では職人たちの全生活に及ぼす親方たちの直接の影響に於てであり、そして次には、この家長制的関係が同一の親方のもとで労働していた職

人たちにとって、彼等をほかの親方たちについていた職人たちに対して結束し、もつて彼等をこれらの職人たちから切り離したところの一の現実的な紐帯であつたからである。なお最後に職人たちは、自身親方になるといふ、彼等のもつていた利害關係によつて既に、現存する秩序に結びつけられていた。それだから、賤民層は、その無力さのためにいつもなんらの效をも奏しなかつたとはいへ、少くとも都市の全秩序に反対する暴動を起すに至つたのに反して、職人たちは単に個々の同業組合の内部での小さい、同業組合制そのものの存在を危くすることのないような反抗運動をなしたに過ぎなかつたのである。中世に於ける大きな蜂起はすべて農村から起つた、併しながらそれらも何様に農民たちの分散状態並びにその結果としての無訓練のために、いつでも全然無効果に終つた。

これらの諸都市に於ける資本はひとつの自然生的な資本であつた、それは住宅、手道具、及び自然生的な、世襲的な取引關係とから成つており、そして交通の未発達と不十分な流通とのために、金に換えられ得ないものとして、親から子へと相伝されねばならなかつた。この資本は近代の資本のように、それがこの物に投じてあらうとまたはかの物に投じてあらうと、それにとつてはなんら問題でないような、貨幣で評価される資本ではなくて、所有者の一定の労働と直接に結びついてそれから全然分離され得ない、そ

してその限りに於て身分的な資本であつた。――

分業は、諸都市の中では個々の〔*social*〕諸同業組合の間に於て、また諸同業組合そのものの中では個々の労働者たちの間に於て、決して徹底的には行われていなかった。各労働者は労働の一範圍全体に亘つて熟達していなければならず、彼の道具をもつて作るべき凡てのものを作ることが出来なければならなかった。狭い範圍に限られた交通と個々の都市間の僅少な連絡とは、**人口の不足していたことと彼等の間に於ける需要に限りがあつたこと**とは、ヨリ進んだ分業の出現を許さなかつた、従つて、親方にならうと欲する者は誰でも彼の手工業全体に熟練していなければならなかつた。それだから中世の手工業者たちにあつてはなお、自分の専門の労働とこの労働に於ける熟練とに対する関心が見受けられ、この関心は一種の偏狭な藝術趣味というところにまで高まることもあり得た。併しながらそれだからまた、中世の手工業者はいずれも全然自分の労働に没頭してしまい、この労働に対して居心地のいい隷属關係をもち、そして、自分の労働に対して無関心である近代の労働者よりも遙かに多く、労働のもとに包摂されていた。

分業のその次の拡大は、生産と交通との分離、商人という特殊な一階級の形成であつた、この分離たるや、歴史的に伝承された諸都市に於ては一緒に（就中ユダヤ人と一緒に

に）繼承され、また新たに建設された諸都市に於ても忽ちのうちに出現したのである。ここに於て近接した地域以外に及ぶ商業連絡の可能性が与えられた、この可能性の実現如何は、現存する諸交通機関に、政治的諸關係によつて制約された田舎の治安状態に（中世全体に亘つて、**周知の如く**、商人は武装せる隊商をなして旅行した）並びに交通の及び得る地域の**その時々**の文化の段階によつて制約された需要の未発達・発達に程度に、かかつていた。——交通が特殊な、一階級に組織されるに至ると共に、**商人によつて**都市の周囲の近接地以外へ商業が拡大されるに至ると共に、直ちに生産と交通との間の相互作用が現われる。諸都市は相互に連絡をとり、新しい道具はひとつの都市から他の都市へ持つて来られることになり、そして生産と交通との間の分業はやがて個々の諸都市の間に於ける生産の新しい分業を喚び起し、**[85b=45]**その各々の都市はやがて或る一つの産業部門を専ら開発することとなる。当初の地方割拠の状態は漸次に解体され始める。

一地方に於て獲得された諸生産力、特に諸發明が、その後の発展にとつて失われてしまふか否かは、ひとえに交通の範囲にかかつている。直接の近接地以外に及ぶ交通がなおなんら存在していない間は、各々の發明は各々の地方に於て別々になされなければならず、そして蛮族の侵入の如き全くの偶然事、いな、普通の戦争でさえが、発達した生

産力と需要とをもった国土を破壊して、もう一度、初発からやり直さねばならぬように立ち至らしめるに十分なのである。歴史の当初に於ては凡ての発明はいずれも日々新たに、且つ各地方地方に於て独立になされねばならなかった。商業が比較的よく拡つていゝる場合に於てさえ、発達した諸生産力の全滅する危険が如何に多いかは、フエニキヤ人及び中世の硝子画術がこれを証明している、フエニキヤ人の諸発明は、その大部分が、この国民が商業から駆逐されたこととアレキサンダーの侵略及びその結果たる衰亡とによつて、永い間失われてしまった。同様に中世に於ては例えば硝子画術がまたそうである。交通が世界交通となり、且つ大産業をその土台にもち、あらゆる国民が競争戦に引き入れられた時に初めて、獲得された諸生産力の永続が確保されたのである。

種々なる都市の間に於ける分業が先ず齎した結果は、工場制手工業の成立、即ち同業組合制の手に負えないまでに発達した生産部門の成立であつた。工場制手工業の最初の興隆——イタリアに於ける、そして後にはフランドルに於ける——は外部の諸国民との交通をその歴史的前提にもつた。他の諸国——例えばイギリス及びフランス——に於ては工場制手工業は当初は国内市場に限られていた。工場制手工業は、上に挙げた諸前提のほかには人口の——特に農村に於ける——集中の並びに一部分は同業組合合法にも拘らず同業組合の中に於て、一部分は商人の間に於て、個人の手中に集まり始めたところの資本の集中の進展をその前提にもつてゐる。

労働は、実に間もなく、それが最も發展力のあるものであることが示された。従来は農村に於て、自分らの必要な衣服を作るために、農民たちによつて片手間仕事に営まれた機械が、交通の拡大によつて刺戟され発達させられた最初の労働であつた。織物業は最初の工場制手工業であり、そしてその後もつねに最も主要な工場制手工業であつた。人口の増加に伴うて被服材料に対する需要が増加したこと、促進された流通にもとづいて自然生的な資本の蓄積と可動化とが始つたこと、これによつて奢侈の欲望が喚び起され且つそれが交通の漸次の拡大によつて一般に促進されたこと、これらは織物業に対して量的並びに質的に刺戟を与え、この刺戟は織物業を従来の生産形態から引き離した。自家用のために機械を営む農民は依然として存続したし且つなお存続しているが、彼等と並んで、諸都市には織物業者の新しい一階級が現われて来た、彼等の織物は全国内市場を目当てにすると共にまた大部分は外国市場をも目当てにしたのである。——大抵の場合僅かの熟練をしか必要とせずしかも程なく数限りもなく多数の部門に細分されたところの労働たる織物業は、その全性質のしからしめるところから、同業組合の桎梏に対して反抗した。従つて織物業はまた大抵の場合、村落や小さな市場町で同業組合的な組織なしに営まれたが、それらの地は漸次に都市となり、しかも程なくその国々に於ける最も隆盛な都市となつた。——同業組合制に束縛されない工場制手工業の成立と共に直ち

にまた財産諸關係が變化した。自然生的な・身分的な資本を超えて進む第一歩は商人の出現によつて行われた、彼等の資本は元々から可動的であり、當時の諸關係のもとに於てそのように言うことが出来る限りに於て、近代の意味の資本であつたのである。進展の第二歩は工場制手工業に伴うて行われた、工場制手工業もまた自然生的な資本の大量を可動化し、そして一般に自然生的な資本の量に対して可動的な資本の量を増大したのである。——同時に工場制手工業は、以前に同業組合都市が農民に避難所として役立つたように、**1850-47**農民に向つて門戸を閉し若くはひどい賃銀しか支払わない同業組合に対する農民の避難所となつた。

工場制手工業の初期は同時に浮浪者群の時代であつた、この浮浪者群は、封建的従者の廃止、帝王に仕えて諸侯に対抗した**寄せ集めの軍隊の解散、農業の改良及び大面積の耕地の牧場への転化**によつて發生せしめられたものである。この事実だけからしても、如何にこの浮浪者群が封建制の解体と嚴密に聯関しているかは明らかである。既に十三世紀に於てこの種の時期がちらほら現われている、一般的に且つ継続的にこの浮浪者群が出現するのは、やつと十五世紀の終り及び十六世紀の初めに至つてからのことである。これらの浮浪者は、なかにもイギリスのヘンリー八世がその七万二千人を絞殺させたといふほどに、数多くあつたのであるが、彼等が労働するようにするのは非常な困難が伴い、彼等は極度の窮乏に追い詰められて、しかも長い間の反抗の挙句やつと労働する

ようになった。工場制手工業の急速なる興隆、特にイギリスに於けるそれは、彼等を漸次に吸収していった。――

工場制手工業の成立と共に種々なる国民が一の競争關係に、即ち商業鬭争に這入った、この商業鬭争は戦争、保護関税及び輸入禁止の形で戦い抜かれた、しかるに、以前にあっては諸国民は、彼等が連絡をもっていた限りに於ては、相互の間に平和な交換を行っていたのである。商業はこの時以來政治的意義をもっている。

工場制手工業に伴うて、同時に、労働者の雇主に對する關係の変化が起つた。同業組合に於ては職人と親方との間にはなお家長制的な關係が存続していた、工場制手工業に於てはこれに代つて労働者と資本家との間に貨幣關係が現われて來た、この關係たるや、農村及び小都市に於ては依然として家長制的に色づけられていたが、しかしヨリ大きな、本来の工場制手工業都市に於ては既に夙くから殆ど凡ての家長制的色彩を失つていた。

工場制手工業及び一般に生産の運動は、アメリカの發見と東印度への航路の發見に伴うて出現したところの交通の拡大によつて異常なる飛躍を遂げた。かの地から輸入された新しい生産物特に大量の金及び銀――これらは流通界に這入つて階級相互の地位を全部變化し、**封建的土地所有及び労働者**に對して手酷い打撃を加えた――探検隊、植民、及び何よりも、今や可能となりそして日々益々多く實現されて行つたところの、諸市場

の世界市場への拡大、これらのものが歴史的発展のひとつの新しい様相を(1868-1914)喚び起した、しかしそれについては一般にここではこれ以上立入ることが許されていない。新たに発見された国々への植民によつて諸国民相互の商業闘争は新たな營養を得、それに応じて範圍を拡大し且つ激烈さを加えた。

商業及び工場制手工業の拡大は可動的資本の蓄積を促進した、しかるに生産の拡張へのなんらの刺激をも経験しなかつた同業組合に於ては、自然的な資本は停頓したままであつたか、さもなければ却つて減少しさえした。商業と工場制手工業とは大ブルジョアジーを作り、同業組合の中には小市民層がかたまつた、彼等は今はもはや、以前のよう、都市に於て支配的位置に立つことなく、却つて大きな商人と工業制手工業者との支配の前に身を屈せねばならなかつた。それだから同業組合は、それが工場制手工業と接触するや否や、その衰亡がやつて来た。

諸国民の交通に於ける彼等相互間の關係は、我々の論じ來つたところの時期の間に、二つの異つた姿態をとつた、当初には、金及び銀の流通する量の僅少なためにこれらの金属の輸出禁止が必要であつた、そして膨脹する都市の人口に職業を与えねばならぬために必要とせられ、大抵の場合外国から移植されたとこの産業は、諸特権なしではやつて行くことが出来なかつた、これらの特権たるや、言うまでもなく、単に国内の競争に対してばかりでなく、むしろ主として外国の競争に対して保護するために賦与され得た

ものであった。これらの当初の輸出入禁止に於て、地方的であつた同業組合の特権が全國民の上に拡大された。関税は、封建的領主が自分の領内を通過する商人に対して掠奪しない代償として賦課した貢納金から発生したものであるが、この貢納金は、その後都市によつても同様に賦課せられ、そしてそれは近代國家の出現に際しては、國庫によつて貨幣を得るための最も手近かな手段であつた。——ヨーロッパの諸市場に於けるアメリカの金銀の出現、産業の漸次の發展、商業の急速なる飛躍及びこれによつて喚び起された同業組合的ならざるブルジョアジーと貨幣との興隆は、これらの右に挙げた諸方策に違つた意味を与えた。貨幣なしにすまふことが日毎に愈々不可能になつた國家は、今や、財政上の諸見地からして金及び銀の輸出禁止を繼續した、ブルジョアにとつてはこの新たに市場に放出された大量の貨幣が暴利獲得の主要対象物であつたので、彼等はいこれらの諸方策がとられることに完全に満足であつた、従來の諸特権は政府にとつて一の収入源泉となり、売られて貨幣に代えられた。関税立法のうちに輸出税が現われて來たが、[86b=49]このものは純粹に財政的な目的をもつており、産業にとつてはただその進路を阻害するだけであつたのである。——

第二の時期は十七世紀の中葉をもつて始り、殆ど十八世紀の終りに至るまで繼續した。商業と航運とは工場制手工業よりも急速に拡大され、工場制手工業は第二次的な役割を

演じた、諸植民地は有力な消費者となり始めた、個々の諸国民は永い間の戦争を通じて、開かれつつある世界市場を分け取りした。この時期は航海条令及び植民地独占をもつて始っている。諸国民相互の間の競争は関税率、輸出入禁止、条約によつて出来るだけ除去された、そして究極に於ては競争戦は戦争（特に海戦）によつて戦われ、勝負を決せられた。海上に於て最も強力な国民、イギリス人が、商業及び工場制手工業に於て優勢を保持した。既にここに一個国への集中が見られる。——工場制手工業は絶えず国内市場に於ては保護関税によつて、植民地市場に於ては独占によつて、そして外国市場に於ては出来るだけ十分に差別関税によつて、保護された。その国自身のうちで産出された原料の加工は保護奨励され（イギリスに於ける羊毛及び麻、フランスに於ける生糸）、国内で産出された原料の輸出は禁止され（イギリスに於ける羊毛）、そして輸入原料の輸出は閑却されるかまたは抑圧されるかした（イギリスに於ける棉花）。海上貿易と植民地的勢力に於て首位に立つていた国民は当然にまた工場制手工業の最大の量的並びに質的拡大を保証されていた。工場制手工業は一般に保護なくしてはやつてゆくことが出来なかつた、というのは、それは、他の国々に於て生ずる極めて僅かな変化によつても、その市場を失い、衰滅させられ得るからである、工場制手工業は或る国に若干程度の都合な条件のもとに於ては容易に移植されたが、またまさにその故に、容易に破壊されたのである。工場制手工業は同時に、それが特に十八世紀に農村に於て営まれたような

仕方を通じて、多数の個人の生活諸関係と極めて密接に結び合わされているために、いづれの国も自由競争を許すことによつて工場制手工業の存在を賭することを敢てなし得ない。それ故に工場制手工業は、それが輸出をするまでに至る間は、全然商業の拡大若くは制限によつて左右せられ、そして商業に対しては比較的に極めて僅少な反作用を及ぼすにとどまつている。十八世紀に於ては、そのために工場制手工業は第二次的な意味しかもたず、またそのために商人は勢力をもつていたのである。**§§C=501** 他の何人にもまして国家の保護と独占とを迫つた者は、商人、特に船主であつた。工場制手工業者も固よりまた保護を要求し且つそれを獲得したのではあるが、しかし政治的重要性に於てはいつでも商人にひけをとつていた。商業都市、特に海港都市は**或る程度まで**文明化され且つ大市民的となつたのに、工場都市に於ては依然として最大の小市民風が存続した。**エーキン等々参照**。十八世紀は商業の世紀であつた。ピントーはこのことをはつきりと云つてゐる。曰く、商業はこの世紀の寵兒の役をしている。また曰く、少し以前からというものは、商業、航海及び海軍のほかもはや何も問題になつていない。――

資本の運動は、著しく急速化されたとはいへ、しかも依然としてなおつねに比較的に緩慢であつた。世界市場が個々の部分に細分されてその各々が別々の国民によつて搾取されていたということ、**諸国民相互の間に於ける競争が排斥されていた**ということ、生

産そのものがたどたどしかつたということ、及び貨幣制度がその最初の段階を出てやつと発展し始めたばかりであつたということ、これらの事情が流通を甚しく阻止した。その結果として小売商人的な汚いけちな根性が出来、この根性は凡ての商人と商業経営の仕方の全体になおこびりついていた。尤も、工場制手工業者に比較しては、従つてなおさら手工業者に比較しては、彼等は確かに大市民であり、ブルジョアであつたが、次の時期の商人や産業家に比較しては、彼等はどこまでも小市民である。アダム・スミス参照。――――

この時期はまた、金及び銀の輸出禁止の撤廃、金融業の、銀行の、国債の、紙幣の、**株式及び公債の投機**の、あらゆる物貨の相場取引り成立によつて、**貨幣制度一般の完成**によつて特徴づけられている。資本はまたもや自己になお粘着せる自然生的性質の大部分を失つた。

十七世紀に於て不斷に進展せるところの、一国即ちイギリスへの、商業並びに工場制手工業の集中は、この国のために漸次に一の相対的な世界市場を作り出し、そしてそれによつてこの国の工場制手工業の生産物に対して従来の産業上の生産力によつてはもはや充され得ないような需要を作り出した。生産力の手に負えないほど大きくなつたこの需要は、**1896=51** 大産業——産業上の目的のための諸自然力の応用、機械及び最も拡

大されたる分業——を生み出したことによつて、中世以降に於ける私有財産制の第三期を招来したところの推進力であつた。この新しい様相の爾余の諸条件——国民の内部に於ける競争の自由、理論力学の發達（ニュートンによつて完成された力学は一般に十八世紀に於てフランス及びイギリスで最も人氣のある科学であつた）等々は、イギリスに於ては既に存在していた。（国内に於ける自由競争でさえもが何処でも革命によつて戦ひとられねばならなかつた——イギリスに於ては一六四〇年及び一六八八年、フランスに於ては一七八九年に。）競争は間もなく、**自己の歴史的役割を保持しよう**と欲した凡ての国々をして、関税方策の改新によつてその国の工場制手工業を保護し（旧関税は大産業に対抗してはもはや用をなさなかつた）次いで間もなく保護関税のもとに大産業を移植することを余儀なくせしめた。大産業は、これらの保護手段にも拘らず競争を一般化し（大産業は実践的な商業の自由であつて、保護関税は大産業にあつては単に一の緩和剤であり、商業の自由の範圍内での一の防禦手段であるに過ぎない）、交通機関及び近代的世界市場を作り上げ、**商業を征服し**、一切の資本を産業資本に転化せしめ、そしてそれによつて迅速なる流通（貨幣制度の完成）及び諸資本の集中を生み出した。それは一般的競争によつて凡ての個人をして彼等の精力を極度に緊張させるように余儀なくした。それは出来得る限りイデオロギー、即ち、宗教、道德等々を撲滅した、そしてこれをなし得なかつた場合には、それはこれらのものを一目瞭然たる虚妄たらしめた。そ

それは、それが各文明国及びその内の各個人をしてその欲望の満足に於て全世界に依存せしめ、もつて個々の国民の従来の自然生的な孤立状態を打破した限りに於て、初めて世界史を生み出した。それは自然料子を資本のもとに包摂し、分業から自然生的性質の最後の外觀を取り去つた。それは、労働の内部でそうすることが可能である限りに於て、一般に自然生的性質を絶滅し、**一切の自然生的關係を解消して貨幣關係となした**。それは自然生的な都市の代りに、一夜のうちに出来上つた近代的な大産業都市を作つた。それは、それが侵入して行つた処では、手工業を、そして一般にあらゆる以前の段階の産業を、破砕した。それは農村に対する都市の勝利を完成した。その特徴は自働的な組織である。それは大量の生産力を産み出したのであるが、これらの生産力にとつて私有財産制は、**[87a=52]**あたかも、同業組合が工場制手工業にとつて、また小さな、農村的な経営が発達しつゝある手工業にとつて桎梏であつたと同様に、一の桎梏となつた。

これらの生産力は私有財産制のもとに於ては単に一面的な發展をなし、その多数はいえむしる破壊力となり、また多量のこのような生産力は私有財産制のうちに於ては全然利用されるに到ることが出来ない。それは一般に、何処に於ても、社会の諸階級の間同一の諸關係を作り出し、そしてそれによつて個々の国民の特殊性を絶滅した。そして最後に、各国のブルジョアジーがなお別個独立な国民的利害を持ち続けている間に、大産業は、あらゆる国民にあつて同一の利害を有し且つそれにあつては国籍が既に廢滅

されているところの一階級を作り出した、この階級たるや、現実に全旧世界から自由であり、そして同時にこれに対立せるものである。それは労働者にとって単に資本家に対する関係をのみでなくまた労働そのものをも堪え難きものにする。

大産業が一国の各地方に於て同一の高さに発達を遂げるものでないのは固よりである。けれどもこのことはプロレタリアートの解放運動を阻止しはしない、なぜなら、大産業によつて生み出されたプロレタリアがこの運動の先頭に立つて全大衆を自己と一緒に引き連れて行くからであり、そして大産業から閉め出された労働者たちは、この大産業によつて、大産業そのものの労働者たちよりもなお一層悪い生活状態に突き落されるからである。これと同様な仕方では、大産業の発達している国々は、多かれ少なかれ非産業的な国々に対して、後者が世界交通によつて一般的な競争戦の中へ引摺り込まれている限り、影響を及ぼすのである。

これらの種々なる形態はそれぞれ労働の、従つて財産の、組織の形態である。いずれの時期に於ても、欲望によつてそれが必要とされていた限りに於て、存在する諸生産力の結合が行われたのである。

生産力と交通形態との間のこのような矛盾は、我々の見たように、従来の歴史のうちに既に幾度も、しかもなお歴史の土台を危くすることなしに、現われた矛盾であつて、

それはその都度一の革命となつて爆發せざるを得なかつた。その際この矛盾は同時に種々なる副次的な姿を採つた、即ち、諸衝突の総体としては種々なる階級間の諸衝突の形をとり、意識の矛盾としては思想闘争等々の形をとり、政治闘争等々の形をとつた。そこでひとは、一の局限された見地からしては、これらの副次的な姿のうちの一つを取り出してそれをこれらの革命の土台であると思ふことが出来る、しかもこのように見ること、革命の出発点であつたところの個人が、自分たちでも、彼等の教育程度と歴史的發展の段階とにそれぞれ応じて、自分たち自身の活動そのものについて諸々の幻想を描いていたために、愈々もつて容易である。――

かくて、歴史上のあらゆる衝突は、我々の見解に従えば、その根源を生産力と交通形態との間の矛盾のうちにもつてゐる。[876=53]尤も、この矛盾が或る一国に於て諸衝突に導くためには、それがこの国自身のうちで極端にまで押し詰められてゐるということとは必要でない。國際交通の拡大によつて喚び起されたところの、産業的にヨリ發達せる諸国との競争は、産業の發達がヨリ進んでゐない諸国のうちに於てもまた同様な矛盾を生み出すに十分である（例えば、ドイツに於ける潜在的なプロレタリアートはイギリスの産業の競争によつて顕現せしめられた）。――

競争は個人を結びつけるにも拘らず、それは個人を、單にブルジョアばかりでなく、

むしろなおヨリ多くプロレタリアを、相互に孤立せしめる。それだから、これらの個人が結合し得るまでには、この結合のために——それが単に地方的であるべきでない以上——必要な諸手段、即ち大産業都市及び廉価で迅速な交通が大産業によって先ず作られていなければならないということは別としても、長い時がかり、またそれだから、これらの孤立化された者そしてこの孤立化を日々再生産するような諸関係の中で生活している個人に対立せるあらゆる、組織された力は永い闘争の後にやっと克服されるのである。これと反対のことを望むのは、あたかも、この特定の歴史的時代に競争は存在すべきでないと望んだり、若くは、個人は、彼等が孤立化された者としてはそれに対してならんの統制をもたないところの諸関係を、脳裡から追い払うべきであると望んだりするのと同じことであろう。——

家屋の建造。蛮人にあつては、各々の家族が、丁度遊牧民の場合に各々の家族の別々の天幕をもっているように、自分自身の穴もしくは小屋をもっているのは言うまでもないことである。このような分立せる家経済は私有財産制のヨリ一層の発展によつてなお益々必要にされるばかりである。農耕民族にあつては共同の家経済は、共同の土地耕作と同様に不可能である。都市の建設は一の大きな進歩を意味した。けれども、従来の凡ての時代に於ては、私有財産制の廃止から切り離すべからざるところの分立せる経済の

排棄ということは、そのための物質的諸条件が存在しなかったという理由からして既に、不可能であつた。共同の家経済の組織は、機械の、自然力の利用の、及びその他の多くの生産力の発展を前提する——例えば、水道、1870-54 瓦斯点燈設備、蒸氣暖房設備等々の発達、都市と農村の排棄の如きがそれである。これらの諸条件なしには、共同の経済なるものはそれ自身また一の新たな生産力であることなく、一切の物質的土台を缺いて、一の単に理論的な基礎の上に立つにとどまり、即ち一の単なる幻想であり、そして高々僧院経済にまで達するに過ぎないであろう。——何が可能であつたかは、都市への密集と個々の特定の目的のための共同の家屋（監獄、兵營等々）の建造とに於て示されている。分立せる経済の排棄が家族の排棄から切り離すべからざることは、おのずから明かなことである。

（各人はその全存在を国家によつて享けている、という聖マックスに於て屢々出て来る命題は、根本に於て、ブルジョアはブルジョア種族の一事例である、という命題と同じものである、この命題たるや、ブルジョアの階級はこれを構成する個人の前に既に存在していたということを前提するのである。）哲学者たちにおけるクラスの先在性 中世に於ては、各都市に於ける市民たちは、死力を盡して自己を防衛するために、土地貴族に對抗して団結することを余儀なくされていた。商業の拡大と交通の施設とは、個々の都

市をして、同一の敵に対する闘争に於て同一の利益を達成したる他の諸都市と相知るに至らしめた。個々の諸都市に於ける多くの地方的な市民層から漸く極めて徐々に市民階級が成立した。個々の市民たちの生活諸条件は、現存する諸関係に対する対立並びにそれから制約された労働の仕方によつて、同時に、彼等の凡てにとつて共通であると共にそのいずれの個人からも独立であつたところの諸条件となつた。市民たちは、彼等が封建的結合体から自己をもぎ離した限りに於ては、これらの諸条件を作り出したのであるが、彼等が所与の封建制に対する彼等の対立によつて制約されていた限りに於ては、これらの諸条件によつて作り出されたのである。個々の都市の間の結合の出現と共に、これらの共通の諸条件は階級の諸条件にまで發展した。同一の諸条件、同一の対立、同一の諸利害は、大体に於てまた何処にも同様な習俗を發生せしめねばならなかつた。ブルジョアジー自身は、最初は、その諸条件と共に漸次に發展し、分業に従つて更に種々なる分派に分裂し、そして遂には、一切の既存する財産が産業資本若くは商業資本に転化される程度に應じて、一切の既存する有産諸階級を自己のうちに吸収する、（＊底本では省略されているがこのあたりに「彼等は先ず直接的に属する労働部門を、次いですべての多かれ少なかれイデオロギー的な緒身分を吸収する」）（これと同時に他方ではブルジョアジーは、既存する無産諸階級の大部分及び従来の有産諸階級の一部分をば一の新しい階級、即ち、プロレタリアートにまで發展せしめる）。個々の個人は、彼等が一の他の階級に対して共

同の闘争を戦わねばならない限りに於てのみ、一階級を形作る、[87d=55] 其余の点に於ては彼等は互いに彼等自身競争に於て再び敵対的に対立する。他方に於て、階級はまた個人に対して独立し、その結果個人は、彼等の生活諸条件を予定されたものとして受取り、階級によつて彼等の生活地位とそして共に彼等の人格的發展を指定して貰い、階級のもとに包摂されることとなる。これは、分業のもとへの個々の個人の包摂と同一の現象であり、そしてただ私有財産及び労働そのものの廃止によつてのみ除去される事が出来る。如何にして階級のもとへの個人のこの包摂が、同時に、種々雑多な表象等々のもとへの包摂にまで發展するか、は我々が既に幾度も暗示して来たところである。――

若しひとが**歴史的に継起する**諸身分及び諸階級の共通の生存諸条件並びにそれと共に個人に押しつけられた一般的諸表象の中に於ける個人のこのような發展を哲學的に考察するならば、ひとは實際容易に、これらの個人に於て種または人間なるものが發展したのであるとか、或いは、これらの個人は人間そのものを發展させたのであるとか、と想像することが出来る。この想像は、それでもつて歴史の横面が二三ひどく擲られるというものだ。そのときにはひとは、これらの種々なる身分及び階級を一般的表現の諸特殊化として、種の諸亜種として、人間なるものの諸發展相として把握することが出来る。

特定の階級のもとへの個人のかかる包摂は、支配階級に対してなんらの特殊な階級利

益をもはや達成するを要しない一階級が形成されるに至るに先立つては、排棄されることが出来ぬ。――

分業による諸々の人格的な力（関係）の物的な力への転化は、それについての一般的表象を脳裡から追い払うことによつて再び排棄され得るのでなく、却つてただ、個人がこれらの物的な力を再び自己のもとに包摂し、**分業を排棄することによつてのみ**、排棄されることが出来る。このことは共同社会なしには**不可能である**。共同社会に於て初めて個人は、**[[[a=56]]]**彼の素質をあらゆる方面に向つて発達させる手段を得る、それ故に共同社会に於て初めて人格的自由は可能になる。共同社会の従来**の諸代用物**、即ち、国家等々のものに於ては、人格的自由はただ、支配階級の諸関係の中で発達した個人にとつてのみ、そしてただ彼等がこの階級の個人であつた限りに於てのみ存在した。従来個人が結合して形作つていたところの見せかけの共同社会は、つねにそれらの個人に対して自己を独立化した、そして同時にそれは、それが一の階級の他の階級に対しての結合であつたが故に、被支配階級にとつては単に一の全然幻想的な共同社会であつたばかりでなく、むしろまた一の新たな桎梏であつた。現実的な共同社会においては個人は、彼等の聯結に於てまたそれによつて、同時に彼等の自由を獲得する。――個人はいつても自己から出発した、けれどもそれは言うまでもなく、彼等の与えられたる歴史的諸条件及び諸関係の内部に於ける自己からであつて、イデオログたちの意味に於ける『純

粹な個人』からではない。しかるに歴史的発展の過程に於て、そしてまさに分業の内部に於ては不可避的な社会的諸関係の独立化によつて、各々の個人の生活の中に、それが人格的である限りに於ての生活と、それが労働のなんらかの部門及びこれに属する諸条件のもとに包摂されている限りに於ての生活との間に於ける一の区別が現われて来る。このことは、例えば、金利生活者、資本家、等々が人格的存在であることをやめるといふが如くに解さるべきではない、むしろ彼等の人格が全く特定の階級諸関係によつて制約され且つ規定されているのである、そしてかの区別は最初一の他の階級に対する対立に於て現われ、彼等自身にとつては、彼等が破産するときに至つて初めて現われるのである。身分に於ては（種族に於てはなおさら）このことがなお蔽い隠されている、例えば、貴族はどこまでもつねに貴族であり、平民はどこまでもつねに平民である、それは、彼の爾余の諸関係を度外視するならば、彼の個性から切り離し得ぬ性質である。階級的個人に対する人格的個人の差別、**個人にとつての生活諸条件の偶然性**は、かの階級、即ち、それ自身ブルジョアジーの一所産たる階級の出現と共に初めて現われて来る。個人相互の間の競争及び闘争が初めて(88b=57)この偶然性を偶然性として産出し且つ発展せしめる。それだから、表象に於ては、個人はブルジョアジーの支配のもとに於ては、**以前よりも**一層自由である、蓋し彼等にとつて彼等の生活諸条件が偶然であるからである、しかし現実に於ては、彼等はもちろん一層不自由である。蓋し彼等はヨリ多く物的

な強力のもとに包摂されているからである。身分の差別はプロレタリアートに対するブルジョアジーの対立に於て特に顕著になる。土地貴族に対立して都市市民の身分、職業団体等々が擡頭したとき、彼等の生存条件、即ち動産と**手工業労働**とは——**これらは既に彼等が封建的団体から分離する以前に潜在的に存在していた**——封建的土地所有に対して主張された或る積極的なものとして現われ、そこでまたそれは、最初にはそれ自身の仕方に於てやはり封建的形態をとつたのである。逃亡農奴が彼等の従来の農奴的地位を或る彼等の人格にとつて偶然的なものとして取扱つたことはたしかである。しかしこうしたことによつて彼等は、単に、ひとつの桎梏から自己を解放しようとするいずれの階級でもがなすところと同一のことをなしたに過ぎないのであり、そして次に彼等は階級としてでなく、却つて個々別々に自己を解放したのである。更に彼等は身分制の範圍から脱出したのでなく、却つて単に一の新たな身分を形作つたに過ぎないのであり、且つこの新たな地位に於てもまた彼等の従来の労働の仕方を保持し、そしてそれをば、その従来のも、既に達せられたその発展に相応せぬ桎梏から解放することによつて、一層発達させたのである。——これに反してプロレタリアにあつては、彼等自身の生活条件は労働である、従つて今日の社会の全体の生存条件は彼等にとつては或る偶然的なものとなつており、これに対しては個々のプロレタリアはなんらの統制をもたず、またこれに対しては如何なる社会的組織も彼等のために統制を与えることが出来ないのだ

る、かくて個々のプロレタリアの人格と彼に押しつけられたところの彼の生活条件即ち労働との間の矛盾は、彼その人にとって現われて来る、蓋し特に、彼は既に若い時から犠牲にされるからであり、また彼の階級の内部に於て、彼を他の階級へ移らせるような諸条件に達するという機会が彼に缺けているからである。――

{88c=58}

注意。次のことは忘れらるべきでない、即ち、既に農奴は生存せねばならなかったし、また大経済が不可能であつてその結果農奴への割当地の分配が行われたために、極めて間もなく、封建領主に対する農奴の諸義務は現物貢納と賦役との平均額にまで軽減されたが、この額というものは農奴にとつて動産の蓄積を可能ならしめ、そしてそれによつて彼が彼の領主の掌中から逃亡することを容易ならしめ、且つ都市市民として彼が榮達することに對する見込を彼に与え、また農奴の間に段階を生ぜしめ、かくて逃亡するよな農奴は既に半ば市民であるという状態となつた。この場合、或るひとつの手工業に熟達している農奴的農民が動産を獲得する機会を最も多くもつていたということは、これまた同じく明白なことである。

かようにして、逃亡農奴は単に、彼等の既に存在せる生存諸条件を自由に發展させ且つ承認させようと欲したにとどまり、従つて究極に於て単に自由なる労働ということに

まで到達したに過ぎなかったのに反して、プロレタリアは、人格として自己を主張するために、彼等自身の従来の生存条件であると同時に従来の全社会の生存条件であるところのもの、即ち労働を廃棄しなければならない。それだからまた彼等は、社会の諸個人が従来それに於てみずからに一の總体的表現を与えたところの形態、即ち国家に対して真正面から対立する地位に立つており、そして、自己の人格を貫徹するためには、国家を顛覆しなければならない。

すべてこれまで展開して来たところから次のような結論が出て来る、即ち、一階級に属する個人がその中に入り込み、且つ第三者に対する彼等の共同の利害によつて制約されていたところの共同関係は、つねに、これらの個人が単に平均個人としてのみ、彼等が彼等の階級の生存諸条件の中に於て生活していた限りに於てのみ、それに所属していたところの共同社会であつた、この共同関係たるや、それらの個人が個人としてでなく、却つて階級成員としてそれに分与していたのである。これに反して、彼等の及び一切の社会成員の生存諸条件を彼等の統制のもとに引き入れるところの革命的プロレタリアの共同社会にあつては、**§§§§=59**それが丁度逆である、即ちこの共同社会には個人が個人として参加する。これこそまさに、個人の自由なる発展と運動との諸条件を彼等個人の統制に従わしめるところの個人の結合である（今日發展し來つた諸生産力の前提の内部に於けることはもちろんである）、これらの諸条件たるや、従来は偶然に委ねられて

おり、そして個々の個人に対して、まさに個人としての彼等の分離によって、また彼等の必然的な結合——それは分業に伴うて生じ、そして個人の分離によって一の彼等にとつて外的な紐帯となるに至つた——によつて、自己を独立化せしめていたのである。従来の結合は、単に一の決して任意的——例えば『民約論』に述べられている如き——ならぬ、却つて、必然的な結合であつた（例えば北アメリカの国家の形成及び南アメリカの諸共和国を参照せよ）、これらの諸条件について、これらの諸条件の内部に於てしかるとき個人は偶然性を享受していたのである。或る一定の諸条件の内部に於て妨げられることなく偶然性を享有し得るといふこの權利を、ひとは従来人格的自由と名づけた。——これらの生存諸条件はもちろんだその時々々の諸生産力と諸交通形態とにほかならないのである。——

共產主義が従来のあるあらゆる運動から區別される点は、それが従来のあるあらゆる生産関係及び交通関係の基礎を变革し、且つあらゆる自然生的な前提を初めて意識的に従来の人間の創造物として取扱ひ、それらのものの自然生的性質を剥奪し、結合せる個人の力に従属せしめるところにある。それ故に共產主義の建設は本質的に経済的である。即ち、個人のこのような結合のための諸条件の物質的な建設であつて、これは既存する諸条件をこのような結合の諸条件たらしめる。共產主義が創造するところの現存物こそまさに、

個人から独立せる現存物の一切を、この現存物がそれにも拘らず個人そのものの従来の交通の生産物にほかならないものである限りに於て、不可能ならしめるための現実的な土台である。それだから共產主義者たちは従来の生産及び交通によつて生み出された諸条件を非有機的なものとして実践的に問題にする、しかもその際彼等は、彼等に材料を給付するということが従来の諸世代の計画**若くは使命**であつたとは想像しないし、また、これらの諸条件がそれを、創造せる個人にとつて非有機的であつたとも信じないのである。

{89a=60}

人格的個人と偶然的個人との間の區別は、概念上の區別ではなく、却つて一の歴史的事実である。この區別は時代を異にするに従つて種々異なる意味をもっている、例えば、身分は十八世紀に於ては個人にとつて或る偶然的なものであり、多かれ少かれ家族もまたそうであつた。この區別は、我々が各時代に代つてなさねばならぬ區別でなく、却つて各時代がその時代に存在せる種々なる要素の間に於て、みずからなし、そしてしかも概念に従つてではなく、却つて物質的な生活の衝突によつて余儀なくされてなすところの區別である。後代にとつて、前代とは反対に、それだからまた後代に前代から伝承された諸要素の間に於て、偶然的として現れるところのものは、諸生産力の一定の發展に相応していたところの交通形態である。諸生産力の交通形態に対する關係は、交通形態

の個人の行動または活動に対する關係である。（この自己活活動の基本形態は言うまでもなく物質的なそれであり、一切の他の精神的、政治的、宗教的、等々のそれはこの物質的な自己活動に依存している。物質的生活の種々なる形状は、言うまでもなく、その時々、既に發展している諸欲望に依存している、そしてこれらの諸欲望の生産並びに充足は共にそれ自身、羊または犬にあつては決して存在しないところの一の歴史的過程である（人間に反対するスチルナーの意地の悪い主要論証）、尤も羊や犬と雖も彼等の現在の姿に於てはたしかに、だが彼等の意に反して、一の歴史的過程の産物である。）

個人がそのもとに於て、**§§§§§§§§§§**矛盾のなお出現していない間は、相互に交通するところの諸条件は、彼等の個性に属する諸条件であつて、彼等にとってなんら外的なものではなく、そのもとに於て、特定の諸關係のうちに生存するこれらの特定の個人が、ただ彼等のみが、彼等の物質的生活並びにそれと聯関するところのものを生産し得るところの諸条件である、従つてそれらは彼等の自己活動の諸条件であり、且つこの自己活動によつて生産されるのである。それだから、彼等がそのもとに於て生産する特定の条件は、矛盾がなお出現していない間は、彼等の現実的な被制約性に、彼等の一面的な存在に相應する、そして彼等の存在の一面性は矛盾の出現によつて初めて自己を顕わにするのであり、従つてただ後代の人々にとつてのみ存在するのである。そのときにはこの条件は一の偶然的な桎梏として現われ、そしてここに於て、それは一の桎梏である、とい

う意識が前代にも転嫁されるのである。

最初には自己活動の諸条件として現われ、後にはその諸桎梏として現われるこれらの種々なる諸条件は、全体の歴史的発展に於て、交通諸形態の相関聯する一系列を形作る、この關聯たるや、桎梏となつた以前の交通形態の代りに、ヨリ發展せる諸生産力並びにそれと共に個人の自己活動の進歩せる仕方に対応する一の新たな交通形態が置かれ、今度はそれがまた桎梏となり次いで一の更に他の交通形態によつて代られる、ということに成立している。これらの諸条件は、いずれの階段に於ても、同一時期に於ける諸生産力の發展に相應するからして、これらの諸条件の歴史は同時に、自己を發展させそしてそれぞれ新しい世代によつて傳承されたところの話生産力の歴史であり、従つてまた個人自身の諸力の發展の歴史である。

この發展は自然生的に行われるが故に、即ち、自由に結合した個人の總体的計画に従属せしめられていないが故に、それは種々なる地方、種族、國民、労働部門、等々に源を發し、これらのもの各々は最初には他から獨立に發展し、後になつて初めて漸次に他と結びつくのである。更に、この發展はただ極めて徐々に行われる、諸利害の種々なる階段は、決して完全には克服されず、却つて單に勝利せる利害に従属せしめられるだけであつて、なお數百年もの間その側に存続するのである。このことからして、次のよ

うな結果が見られる、即ち、一国民の内部に於てさえ個人は、彼等の財産諸關係を度外視しても、全く相違せる程度の發展をもっている、また以前の利害は、それに固有な交通形態が既に後代の利害に応ずる交通形態によつて追ひ除けられていても、なお永い間、個人に対して独立化された見せかけの共同社会（国家、法律）のうちに於て一の伝統的な力を依然として所有し続ける、この力たるや、究極に於てはただ革命によつてのみ打破され得るのである。このことからしてまた、何故に、一のヨリ一般的な概括論を許すような個々の諸点に關しては、[\[330-62\]](#)意識が時として同時代の經驗的諸關係よりも一步先に進んでいるかの如く見えることが出来、その結果、ひとが後の時代の諸鬭争に於て前代の理論家たちを諸權威として援用することが出来るか、ということも説明されるのである。――これに反して、北アメリカの如く、既に發展した歴史的時代に於て最初から始めるところの国々にあつては、發展は甚だ急速に行われる。このような国々は、そこへ移住せる個人、しかも彼等の諸欲望に相應しないところの旧い国々の諸交通形態によつてそこへ移住する動機を与えられた個人以外にはなんら他の自然的な前提をもつていない。それだからそれらの国々は旧い国々の最も進歩した個人をもつて、従つてこれらの個人に相應する最も發展した交通形態をもつて、しかもこの交通形態がなお旧い国々に於て實現され得ない先きに、事を始めるわけである。これは、それが單なる軍事上若くは商業上の根拠地でない限り、凡ての植民地がそうである。カルタゴ、ギリ

シア植民地及び十一、十二世紀に於けるイスラランドがその実例を提供している。これと同様な関係は征服の場合に於ても、もし征服された土地へ他の地盤の上で發展せる交通形態が出来上つたものとして持つて来られる場合には、生ずる。その母国に於てはこの交通形態はなお以前の時代からの諸利害と諸關係とにつきまとわれていたのに反して、ここに於てはそれは、**征服者たちに永續的な權力を保証するためだけにでも**、完全に且つ障害なしに、實現され得、またされねばならない。（ノルマン人の征服後のイギリス及びナポリ、これらの地はこの征服に際して封建的組織の最も完成された形態を得たのである。）

この全史觀にかの征服なる事實は矛盾するかのように見える。從來ひとは暴力、即ち、**戦争、掠奪、強盜殺人等々**をもつて歴史の推進力となして來た。我々はここではただ主要な諸点にのみ限つて論じて差支えない、従つて我々はただかの顯著なる例、即ち、野蛮民族による奮い文明の破壊及びその後を承けて最初から開始された社会のひとつの新たな組織の形成を例にとることにしよう。（ローマと野蛮人、封建制とガリヤ人、東ローマ帝国とトルコ人。）**{889d=63}**征服を行う野蛮民族にあつては、戦争そのものがなお、既に上に暗示しておいたように、一の正常的な交通形態であつて、このものは、彼等之間にしきたりの且つ彼等にとつて唯一的に可能な、原始なる生産の仕方のもとに於て人

口の増加のために新たな生産手段の必要が作り出されることの多ければ多いほど、益々熱心に利用されるのである。イタリアに於てはこれに反して、土地所有の集中（これは買い占めや負債責めによるほか、なおまた相続によつて惹き起されたのである、というのは、淫風が盛んで結婚というものが稀であつたために、旧門が漸次死に絶えて、その領地が少数者の手に歸したからである）と、所有土地の牧場への転化（これは今日もお行われている普通の経済的諸原因によるほか、掠奪穀物や貢納穀物の輸入及びその結果としてのイタリア産の穀物の消費者の缺乏によつて惹き起されたのである）とのために、自由民は殆ど影を没し、奴隸そのものも繰り返し繰り返し死に絶えてつねに新たな奴隸によつて補充されねばならなかつた。奴隸制が依然として全生産の土台であつたのである。自由民と奴隸との間に立つ平民は、嘗てルンペンプロレタリアート以上に出でるに至らなかつた。一般にローマは嘗て都市以上に出でず、諸地方とは一の殆ど単に政治的な聯関に立つにとどまつた、この聯関がまた再び政治的諸事件によつて中断され得たということは言うまでもないのである。

— — —

歴史に於てはこれまで問題はただ単に奪取ということにかかつていた、という觀念ほどありふれたものはまたとない。野蠻人がローマ帝国を奪取する、とひとは云う、そしてこの奪取なる事実をもつてひとは古代的世界から封建制への推移を説明する。併しな

がら、**野蛮人による奪取**にあつて問題なのは、奪取される国民が、近代の諸民族の場合に於てそうであるように、産業的諸生産力を發展せしめていたか、それとも、彼等の諸生産力が主として単に彼等の結合及び共同組織を基礎とするに過ぎないか、ということである。奪取は更に奪取される対象によつて制約されている。**証券の形をとつて存在する金利生活者の財産は、奪取する者が奪取された国の生産並びに交通諸条件に服従する**でなければ、決して奪取され得ないのである。近代的な産業国の総産業資本についてと同様である。そして最後に、奪取はいつでも極めて直ぐに行き詰まる。そしてやはり奪取すべき何物もなくなれば、ひとは生産し始めざるを得ない。このように、生産の必要が極めて直ぐに生じて来る結果、**(90a=64)**定住する征服者たちによつて採用された共同組織の形態は、既存する諸生産力の發展段階に相応せざるを得ず、また若し最初からそういうことでない場合には、諸生産力に應じて自己を變化せざるを得ないのである。このことからしてまた、かの民族移動の後の時代に於て到る処に見られたような事実、即ち、奴隸が主人であり、征服者が被征服者から言語、教養及び慣習を極めて直ぐに採用したという事実、は説明されるのである。——封建制は決してドイツから出来上つたものとして持ち込まれたのでなく、却つてそれは征服者の側に於て、あたかも征服の期間中に於ける軍隊制度の戦闘組織のうちにその起源をもっているのであつて、この戦闘組織が征服後に於て被征服諸国のうちに既に存在していた諸生産力の影響を受けて初め

て本来の封建制にまで発展したのである。この形態が如何に甚しく諸生産力によつて制約されていたかは、古代ローマの諸遺制から発する別な諸形態を実施しようと試みて挫折したという事実がこれを示している（カール大帝、等々）。〔「もつと続けること」というメモ風文有り〕

大産業と競争との中に於ては、個人の全部の生存条件、被制約性、一面性は、二つの最も簡単な形態、即ち私有財産と労働とに溶解している。貨幣の成立と共に、あらゆる交通形態及び交通そのものが個人にとつて偶然的なものたらしめられる。それ故に既に貨幣のうちには、従来の一切の交通は単に一定の諸条件のもとに於ける個人の交通に過ぎないものであつて、個人としての個人の交通ではなかつた、ということが含まれている。これらの諸条件は二つのもの——蓄積された労働即ち私有財産が若くは現実的な労働か——に還元されている。これらのものが、若くはそのうちの一つが存在しなくなれば、交通は停止する。近代の経済学者たち自身、例えば、シスモンディ、シエルブリエ、等々、は、個人の聯合を資本の聯合に対立させている。他方に於て個人たち自身は完全に分業のもとに包摂されており、そしてそれによつて最も完全な相互依存関係の中に立たしめられているのである。私有財産は、それが労働の内部に於て労働に対立している限りに於ては、蓄積の必然性にもとづいて発展し、そして当初にはいまだなおヨリ

多く共同組織の形態を有しているが、更に發展するに従つて絶えずヨリ多く私有財産の近代的形態に近づいてゆく。分業の成立によつて既にその当初からまた労働諸条件即ち道具や材料の分割が行われ、これと共に蓄積された資本の種々なる所有者への細分が行われ、これと共に資本と労働との間の分裂が行われ、そして財産そのものの種々なる形態が与えられる。分業が益々發達するに従い、§§§§§そして蓄積が益々増大するに従い、このような分裂もまた益々鋭く發達する。労働そのものはただこのような分裂の前提のもとに於て存立することが出来る。——

(個々の国民の個人の人的エネルギー——ドイツ人とアメリカ人——エネルギーは既に人種の混淆による——それだからドイツ人は馬鹿者だ——フランス、イギリス、等々に於ては、異民族が既に發展していた土地に、アメリカに於ては全然新開の土地に移植された、ドイツに於ては自然生的な住民がそのままとどまつていた。)

かくてここに二つの事実が示される。第一に、生産力が個人から全く独立な且つ切り離されたものとして、個人と並んで存する一の独自の世界として現われる、このことたるや、あたかもその力が生産力であるところの個人が分裂し且つ相互に対立して存在しているところにその根源をもっている、しかるに他方に於て、これらの力はただこれ

らの個人の交通と聯関とのうちに於てのみ現実的な力であるのである。それだから一方の側には諸生産力の一總体が立ち、これらの生産力はいわば一の物的姿態をとっており、個人自身にとつてはもはや個人の力ではなく、却つて私有財産の力であり、従つてただ個人が私有財産所有者である限りに於て個人の力であるに過ぎないのである。過去のいづれの時代に於ても生産力が個人としての個人の交通に対してこのような無縁な姿態をとつたことはない、蓋し彼等の交通そのものがなお局限されたものであつたからである。他方の側には、これらの生産力に対して個人の大多数が対立する、彼等からはこれらの力が切り離されており、従つて彼等は一切の現実的な生活内容を奪われて抽象的な個人となつてゐる、彼等は併しながらそのことによつて初めて個人として相互に結合し得る状態におかれてゐるのである。彼等がそれを通じてなお諸生産力並びに彼等自身の生存とつながつてゐる唯一の聯関たる労働は、彼等にあつては自己活動の一切の外観を失つてしまつて、**(90c=66)**ただ彼等の生活を不快ならしめることによつて、彼等の生活を単に維持してゐるに過ぎない。過去の諸時代に於ては、自己活動と物質的生活の生産とはそれらが異なる人間に帰属してゐたことによつて分離されてゐたのであり、そして物質的生活の生産は、個人自身の局限性のためになお一種の従属的な自己活動の意味をもつていたのであるに反して、今日に於ては両者の分離は、一般に物質的生活が目的として現われ、この物質的生活の生産即ち労働**(これが自己活動の今では唯一的に可能な、し**

かし、我々の見る如く、否定的な形態である）が手段として現わるといふ姿をとっている。

されば今や個人は、単に彼等の自己活動に達するためにばかりでなく、むしろ一般に彼等の生存を確立するために既に、現存する諸生産力の総体を領有しなければならぬ状態にまで立ち到っている。この領有は先ず領有すべき対象——一の総体にまで発展し且つ一の世界的交通の内部に於てのみ存在するところの諸生産力——によって制約されている。それ故にこの領有は、この方面からして既に、諸生産力及び交通に相応するところの一の世界的性格をもつでなければならぬ。これらの諸力の領有はそれ自身物質的・生産要具に相応する個人の諸能力の発展以外の何物でもない。この理由だけからしても、諸生産要具の総体の領有は、個人そのものに於ける諸能力の総体の発展である。この領有は、更に、領有する個人によって制約されている。一切の自己活動から完全に除外されている現代のプロレタリアのみが、諸生産力の総体の領有とそれに伴って顕われる諸能力の総体の発展ということに存するところの、彼等の完全な、もはや局限されぬ自己活動を実現することが出来る。過去のあらゆる革命的な領有は局限されていた。その自己活動が制限されたる生産要具及び制限されたる交通によって局限されていた個人は、 $90d=671$ の制限されたる生産要具を領有したのであって、従つて一の新たな制限性を齎したに過ぎなかった。彼等の生産要具は彼等の財産となつた。併しながら彼等

自身はどこまでも分業のもとに、並びに彼等自身の生産要具のもとに包摂されていた。従来の一切の領有にあつては、個人の大衆は唯一の生産要具のもとにどこまでも包摂されていた。プロレタリアの領有にあつては、諸生産要具の大量は各々の個人のもとに、**そして財産は一切の個人のもとに包摂されなければならない**。近代の世界的交通は、それが一切の個人のもとに包摂されることによつてでなければ、個人のもとに包摂されることは出来ないのである。――

領有は、更に、それが如何に行われねばならないかという方法によつて制約されている。それはただ、プロレタリアートそのものの性格にもとづいてやはりまた世界的なものであるのほかない団結によつて、且つ革命によつてのみ遂行され得るのである。この革命に於ては、一方では従来の生産並びに交通の仕方及び社会的組織の力が顛覆され、そして他方ではプロレタリアートの世界的性格並びに領有の遂行に必要なエネルギーが発展し、更にプロレタリアートはその従来の社会的地位のためになお彼から去らずにいた凡てのものを脱ぎ棄てるのである。

この段階に至つて初めて自己活動と物質的生活とが合致する、このことは個人の全体的個人への発展並びにあらゆる自然生的性質の脱却に相応する。そしてそのときそれに相応して労働は自己活動へ転化し、従来の制約されたる交通は個人としての個人の交通へ転化する。結合されたる個人による総体的な生産力の領有と共に私有財産は無くなる。

従来の歴史に於てはつねになんらかの特殊な条件が偶然的なものとして現われたのに反して、今や個人の分離そのものこそ、いずれかの一個人の特殊な私的営利そのものこそ、偶然的となつてゐる。

もはや分業のもとに包摂されていない個人を、(91a=68) 哲學者たちは『人間』の名のもとに理想として表象し、そして我々によつて展開されたる全過程をば『人間』の發展過程として把握して來た、その結果、各々の歴史的段階に於ける従来の諸々の個人に對して『人間』がすりかえられ、そしてこのものが歴史の推進力として叙述されたのである。かようにして全過程は『人間』の自己疎外の過程として把握されたのであるが、このことたるや、本質的には、後の段階に於ける平均個人がつねに前の段階に推し及ぼされ、そして後代の意識が前代の個人にまで推し及ぼされたことに由来するのである。もともと現実の諸条件を度外視しているところのこの顛倒によつて、全歴史を意識の發展過程に轉化することが可能であつたのである。――

市民的社會なるものは諸生産力の一定の發展段階の内部に於ける個人の物質的交通の全体を包括している。それは或るひとつの段階の商業的及び産業的生活の全体を包括しており、そしてその限りに於ては國家及び國民を超越せるものである、とはいえそれは、他方に於てはまた、外に向つては國民として自己を主張し、内に向つては國家として自

己を組織せざるを得ないものである。『市民的社会』という語は、財産諸關係が既に古代的及び中世的共同組織から辛苦して脱け出したところの十八世紀に於て現われて来た。本来の市民的社会はブルジョアジーを俟つて初めて發展する。けれども、あらゆる時代にあつて国家及びその他の觀念的上部構造の土台を形作るところの、直接に生産及び交通にもとづいて發展する社会的組織は、ずっと同一の名称をもつて呼ばれて来たのである。――

【C】 国家及び法律の財産に対する關係

財産の最初の形態は、古代的世界に於てもまた中世に於ても、種族財産であつて、それはローマ人にあつては主として戦争によつて、**§1b=69**ゲルマン人にあつては牧畜によつて制約されていた。古代の諸民族にあつては、一都市のうちに数多の種族が一緒に居住していたために、種族財産は國家財産として現われ、そしてそれに対する個々の人間の權利は單なる占有、しかも種族財産が一般にそうであるように、單に土地所有にのみ限られたる占有として現われている。本来の私有財産は、古代の諸民族にあつても近代の諸民族にあつてのようによつて、動産所有と共に始まる。――（奴隸と共同組織）（市民權にもとづく所有權）。中世から抜け出して前進しつつある諸民族にあつては、種族

財産は種々なる段階――封建的土他所有、職業団体的動産所有、工場制手工業資本――

を通じて近代的な、大産業と世界的競争とによつて制約されたる資本にまで、即ち、共同組織の一切の外観を脱ぎ棄て且つ財産の発展に対する国家の一切の影響を排除したところの純粹な私有財産にまで發展する。この近代的な私有財産に近代的な国家が相応している、この国家たるや、租税を通じて漸次に純粹な私有財産所有者たちに買い取られ、国債制度によつて完全に彼等の掌中に落ち、その存在は取引所に於ける国庫証券の騰落に關係して、全然、私有財産所有者たち即ちブルジョアが国家に与える商業上の信用に依存することになつたのである。ブルジョアは既に、それが一の階級であつてもはや一の身分ではないが故に、自己をもはや地方的にでなく国民的に組織し、そしてその平均的利害に一の一般的な形態を与えるように余儀なくされた。私有財産が共同組織から解放されたことによつて、国家は、市民的社會と並んだ且つその外にある一の特種な存在となつた。併しながら国家は、ブルジョアが外並びに内に向つて、自己の財産と自己の諸利害との相互的保証のために、**必然的に**自己に与えるところの組織の形態以外の何物でもないのである。国家の独立性は、今日のところただ、そこでは身分が完全に階級にまで發展しておらず、そこでは先進諸国にあつては[△]克服された[▽]**排除されてしまつた**身分がなお一の役割を演じており、そして或る混合状態が存在し、従つてそこに於ては人口の如何なる部分もその余の部分に対して支配的地位に立つに至り得ないところの諸国に於てのみなお存在している。これは特にドイツに於てそうである。近代的国

家の最も完成せる例は北アメリカである。**[91c=70]**近代のフランス、イギリス及び北アメリカの著述家たちは凡て、国家はただ私有財産のためにのみ存在する、という風に述べているが、かくもこのことはまた個人の意識の中へも入り込んで行つたのである。

国家は、それに於て一の支配階級に属する個人が彼等の共同の利害を主張する形態であり、**且つそれに於て一の時代の全市民的社会が自己を総括する形態であるが故に**、その結果、あらゆる共同的な制度は国家によつて媒介せられ、一の政治的形態を得るといふことになる。そこからして、あたかも法律が意志に、そしてしかもその実存的な土台から切り離されたる意志に、即ち自由なる意志に基礎をもつかの如き幻想は生れて来る。しかるときには同じ仕方で権利もまた法律に還元される。

私法は、私有財産と同時に、自然生的な共同組織の解体から発展する。ローマ人にあつては私有財産及び私法の発展は進んだ**産業上及び商業上の**諸結果を伴わずに終つた、蓋し彼等の生産の仕方但凡て変化がなかつたからである。封建的共同組織が産業及び商業によつて解体された近代の諸民族にあつては、私有財産及び私法の成立と共に、ヨリ一層の発展の可能性をもつた一の新たな様相が始つた。中世に於て広範圍の海上商業を営んだ最初の都市たるアマルフイは、直ちにまた海商法をも発達させた。先ずイタリアに於て、後には他の諸国に於て、産業と商業とが私有財産を更に一層発展させるや否や、直ちに発達せるローマ私法が再び採用され、且つ權威にまで高められた。その後ブルジョ

アジアが大いに力を得て来た結果、王侯がブルジョアの手を通じて封建貴族を顛覆せんがためにブルジョアジーの諸利害を認容するに至ったとき、凡ての国に於て、フランスでは十六世紀に於てのことであつたが、法の本来の発展が始つた、そしてこの発展は、**(1671)**イギリスを除いては、凡ての国に於て、ローマ法典の土台として行われた。イギリスに於てもまた私法をヨリ進んで発達させるためには（特に動産所有の場合に）ローマ法の諸根本命題が取り入れられねばならなかつたのである。——（忘れてならないのは、法が宗教と同様自己自身の歴史をもたないということである。）

私法に於ては、現存する財産諸関係は普遍的意志の諸結果として表明される。使用及び濫用の権利そのものは、一方では、私有財産が共同組織から全然独立になつたという事実を言い表し、そして他方では、あたかも私有財産そのものが単なる**私的意志**に、即ち、物に対する**任意的な処分権**に基礎をもつかの如き幻想を言い表すものである。実践に於ては、濫用ということは、若し私有財産所有者にして彼の財産及びそれと共に彼の濫用の権利が他人の手に移るのを見ることを欲しないならば、私有財産所有者にとつて極めて限定された経済上の限界をもっている、蓋し、一般に物は、単に私有財産所有者の意志に対する関係に於て見られるならば、なんら決して物であるのでなく、却つて交通に於て初めて、しかも法からは独立に、物となるのであり、現実的な財産となるのであるからである。（哲學者たちが觀念と名づけるところのひとつの**關係**。）（**關係は哲**

學者たちにとっては觀念に等しい。彼等は單に『人間なるもの』の自己自身に対する關係を知るのみである、それだから一切の現実的な關係は彼等にとっては諸々の觀念となる）。〔このまでのマルクスの書き込みは挿入位置指定は無い。(一)も無い。〕——法を單なる意志に還元するこのような法律的幻想は、財産諸關係が一層發展すれば必然的に、或る人が物を現実に所有することなしに、その物に対する法律上の権限をもつことが出来る、といったことにまで進んでゆく。〔このあたりに「諸意志に意志として現実的な、等々」〕例えば、若し競争によつて或る土地の地代がなくされる場合、その土地の所有者はもとより使用及び濫用の權利を含めてその土地に対する彼の法律上の権限をもつていはするが、しかし若し彼にしてなおそのほかに彼の土地を耕作するに足るだけの資本を所有していない場合には、彼はかかる權利だけではどうすることも出来ず、彼は土地所有者として何物も所有していないのである。法律家たちのまさに同じ幻想からして、**法律家たちにとってまたいづれの法典にとつても、個人が相互に諸關係を結ぶこと(例えば諸契約)は一般に偶然的であるということ**、そして法典にとつてはこれらの諸關係はひとが任意に取り結びまたは取り結ばないことが出来〔92a=72〕且つその内容が当事者たちの個人的意志にもとづくような諸關係と看做されているということ、が説明される。産業及び商業の發展によつて新たな諸交通形態、例えば、保険、会社、等々が形作られるたび毎に、法はいつでもそれらのものを財産獲得の諸々の仕方の中に取り容れるように余儀なくされた

のである。

分業の諸科学に及ぼす影響。

国家、法、道德等々にあつて圧迫といわれるものに等しきもの。

法律に於てブルジョアは自己に一の普遍的な表現を与え得るのでなければならぬ、蓋しまさに彼等は階級として支配するのであるからである。

古代国家、封建制、絶対王制に於て見られるが如き共同組織には、この紐帶には、特に宗教的諸表象が相応する。

自然科学と歴史。

政治、法律、科学、等々の、藝術、宗教、等々の歴史なるものはなんら存在しない。

何故にイデオログたちは凡てのものを逆立ちさせるか。

宗教家、法律家、政治家。

法律家、政治家（経世家一般）、道学者、宗教家。一つの階級の中に於けるこのようなイデオロギー上の細別に應じて分業による職業の独立化が行われ、各自は自己の職業をもつて真の職業であると考え、彼等の職業が現実に対して立つ聯関について彼等は諸幻想を作り上げるが、それは、このことが既に職業そのものの犠資によつて制約されているのであるが故に、それだけ益々必然的である。諸關係は法律学、政治学、等々に於ては、即ち意識に於ては諸概念となる。彼等はこれらの諸關係を超越しているのではないからして、彼等の頭腦の中に於けるこれらの諸關係についての諸概念もまた固定せる諸概念である。例えば裁判官は法典を適用する、そこで彼にとつては立法が真の、能動的な起動者の意味をもっている。彼等の商品に対する尊敬がある、なぜなら彼等の商売は普遍的なものを取扱っているからである。

法のイデー、国家のイデー。通常の意識に於ては事物は逆立ちさせられている。

宗教はもともと超越者の意識であり、現実的知識から生れる。ヨリ通俗的な……

伝統、法、宗教、等々にとつて、

{92b}

個人はつねに自分自身から出発して來たし、つねに自分自身から出発する。彼等の諸

關係は彼等の現実的な生活過程の諸關係である。彼等の諸關係が彼等に対して独立化するということ、彼等自身の生活の力が彼等に対して圧倒的な力になるということ、は何に由来するか。

一言にしていえば、分業は…その時々的发展段階に於ける生産力に依存する。

土地所有、公共団体財産、封建的な、近代的な。

都市の財産、工場制手工業の財産、産業資本。

[以下は欄外にエンゲルスの筆で]

I

フオイエルバッハ

唯物論的見方と觀念論的見方との対立

/192}


〔分業と財産の語形態〕

〔この表題は原稿にはない。㊦、㊧は浄書稿と見られる。廣松版では、

{S14=35} の後に配置してゐる。}

種々なる国民相互の諸關係は、どの程度までそれらの諸国民の各々がその諸生産力、分業及び国内交通を發展させたかということに依存する。この命題は一般に承認されている。併しながら、単に一国民の他国民に対する關係ばかりでなく、またこの国民そのものの全内部構成もこの国民の生産とその**国内並びに對外交通**との發展段階に依存している。一国民の諸生産力が如何なるところまで發展しているかは、分業の發展の到達している程度がこれを最も明瞭に示している。いずれの新たな生産力も、それが従来既に知られている諸生産力の単に量的な拡大（例えば**所有地の開墾**）でない限り、分業の新たな發展を結果として伴うものである。

一国民の内部に於ける分業は、先ず、**産業労働及び商業労働**の農耕労働からの分離、そしてそれと共に都市と農村との分離並びに両者の諸利害の対立をもたらす。分業のヨリ一層の發展は商業労働の産業労働からの分離に導く。それと同時に、これらの種々なる部門の内部に於ける分業によって、更に、一定の労働のために協働する個人の間に種々なる部類が發展する。これらの個々の部類の相互に対する地位は、農耕労働、産業労働及び商業労働の經營の仕方（家長制、奴隸制、身分、階級）によって制約されている。

これと同一の諸關係が、ヨリ發展した交通の場合に、種々なる国民相互の諸關係の中に現われる。

分業の發展段階が種々異なるに従つて財産の形態も同じように異なる。換言すれば、分業のその時々々の段階がまた労働の材料、要具及び生産物との關係に於ての個人相互の諸關係をも規定するのである。

財産の最初の形態は種族財産である。それは、一の民族が狩獵と漁撈とによつて、牧畜によつて若くはせいぜい農耕によつて生活するという生産の未発達な段階に相應する。この最後の場合には、それは大量の未開墾地を前提している。分業はこの段階に於てはなお極めて僅かしか發展せず、家族内に存在する自然生的な分業の多少拡大されたものとどまる。従つて社会構成は家族の拡大たるにとどまっている、即ち、家長的な種族の首長があり、そのもとに種族の成員があり、最後に奴隷があるという風である。家族のうちに潜在的に存在する奴隸制は、人口及び欲望の増加に伴い、また戦争にせよ交易にせよ、対外交通の拡大に伴い、初めて漸次に發展する。

第二の形態は古代的な**公共団体財産及び国家財産**である、これは特に**契約若くは征服による**数多の種族の一都市への結合から生ずるものであつて、そしてこの場合にも奴隸制は依然として繼續して存在する。公共団体財産と並んで既に動産私有として後にはまた不動産私有が發展するが、しかしそれは一の例外的な、公共団体財産に対して從属的

な形態としてである。公民はただ彼等の共同社会のうちに於てのみ(66) 彼等の労働奴隷に對する支配力を所有しており、そのために既に、公共団体財産の形態に拘束されている。公共団体財産なるものは活動的な公民の共同の私有財産であつて、これらの公民は奴隷に對する關係上この自然生的な聯合の仕方のうちにとどまることを余儀なくされているのである。それだから、これを土台とする社会の全構成は、そしてそれと共に民族の力は、特に不動産私有が發展する程度に應じて同じ程度に崩解する。分業は既にヨリ一層發展している。我々は既に都市と農村との対立を、後には都市の利害を代表する国家と農村の利害を代表する国家との間の対立、そして諸都市そのものの内部に於ても産業と海上商業との間の対立を見出す。市民と奴隷との間の階級關係は完全に發達している。

{この後二文の削除有り}

私有財産の發展に伴い、ここに最初に、我々が近代的な私有財産の場合に、ただヨリ拡大されたる規模に於て、再び見出すであろうところのものと同一なる諸關係が出現する。一方では私有財産の集中がそれであつて、これはローマに於ては極めて夙くから始まり(リキニウスの耕地法がその証左である)、内乱以来そして特にカイザル治下に於て甚だ急速に行われた。他方ではこのことと聯關して平民的小農のプロレタリアートへの転化がそれである、けれどもこのプロレタリアートたるや、有産市民と奴隷との間に立つその中途半端な地位のために、なんらの独立な發展にも到らなかつた。

第三の形態は封建的若くは身分的財産である。古代が都市及びその小領域から出発したとすれば、中世は農村から出発した。大面積の土地の上に稀薄に散在していた既存の人口——この人口は征服者によつてなんらの大きな増加も与えられなかった——が出发点のこのような変化を制約した。🏰🏰それだから、ギリシア及びローマとは反対に、封建的發展は、ローマの征服並びに当初それと結びついて行われたところの農業の普及によつて準備されたる、一の著しく拡大されたる地盤の上に於て始まつている。没落しつつあるローマ帝国の最後の数世紀及び野蛮人による征服そのものは大量の諸生産力を破壊した、農耕は低下し、産業は販路の缺乏のために衰頹し、商業は弛緩し若くは暴力によつて杜絶せしめられ、農村及び都市の人口は減少した。このような既存の諸關係及びそれによつて制約されたる征服の組織の仕方は、ゲルマン人の軍制の影響のもとに、封建的財産を發展せしめた。封建的財産は、種族財産及び公共団体財産と同様に、これまた一の共同組織に基礎をおいている、けれどもこの共同組織に対して、直接に生産にたずさわる階級として対立するものは、古代の共同組織の場合のように、奴隸ではなくて、農奴的な小農である。封建制が完全に発達すると同時に、なおこの上に都市に対する対立が加わつて来る。土地所有の教權制的構成及びこれと聯関する武裝せる從臣は貴族に農奴を支配する力を与えた。この封建的構成は、まさに古代の公共団体財産と同様に、生産にたずさわる被支配階級に対しての一の聯合であつた、ただ聯合の形態と直接の生

産者たちに対する関係とが違つていただけであつた、なぜならそこには違つた生産諸条件が存在していたからである。

土地所有のこのような封建的構成に相應して、諸都市に於ては職業組合的財産、即ち、手工業の封建的組織が存在した。[4a] 財産はここでは主として各個人の労働に存した。聯合せる掠奪貴族に対抗しての聯合の必要、産業家が同時に商人であつた時代に於ての共同の市場家屋の必要、繁栄せる諸都市へ流れ込んで来る逃亡農奴たちの増大してゆく競争、全国の封建的構成、これらのものが同業組合を招来した。個々の手工業者たちが諸小資本を漸次に節約して蓄えたということ、そして**彼等の数が人口の増加に拘らず動かなかつた**ということが職人並びに徒弟関係を發展せしめた、そしてこの関係は都市のうちに農村に於けるそれと類似的教権制的関係を成立せしめたのである。

このようにして、封建時代に於ては、主要財産は、一方では、それに結びつけられていた農奴労働を含めての土地所有に存し、そして他方では、職人の労働を支配する小資本を含めての自己自身の労働に存した。両者の構成は局限された生産諸関係——僅少な、粗野な土地耕作及び手工業的な産業——によつて制約されていた。分業は封建制度の開花期にはあまり行われなかつた。いずれの国も自己のうちに都市と農村との対立をもち、身分の構成はもとより甚だ鋭く現われていたが、しかし農村に於ける王侯、貴族、僧侶と農民の差別、そして都市に於ける親方、職人、徒弟及び間もなくまた日傭賤民の差別

のほかにはなんら重要な分割は行われなかった。農耕に於ては分業は零細耕作によつて困難にされ、**その側ら農民そのものの家内産業が現われ**、産業に於ては労働は個々の手工業そのものに於ては全然分割されず、個々の手工業の間にも極めて僅かしか分割されていなかった。産業と商業との分割は比較的古い都市では既に存在していたが、**(4b)**比較的新しい都市に於ては都市が相互に關係を結ぶに至つた後の時代に初めて發展した。

比較的大きな国々が封建的な王国に総括されるということは、都市にとつてのよう土地貴族にとつて一の必要であつた。それだから支配階級即ち貴族の組織はどこでもひとりの帝王を上戴着いた。

{余白を残しここで終わる} / (4)

底本 岩波文庫
ドイツチェ・イデオロギー
昭和五年七月一五日発行
訳者 三木清

作成日 2007年4月19日
作成者 石井彰文